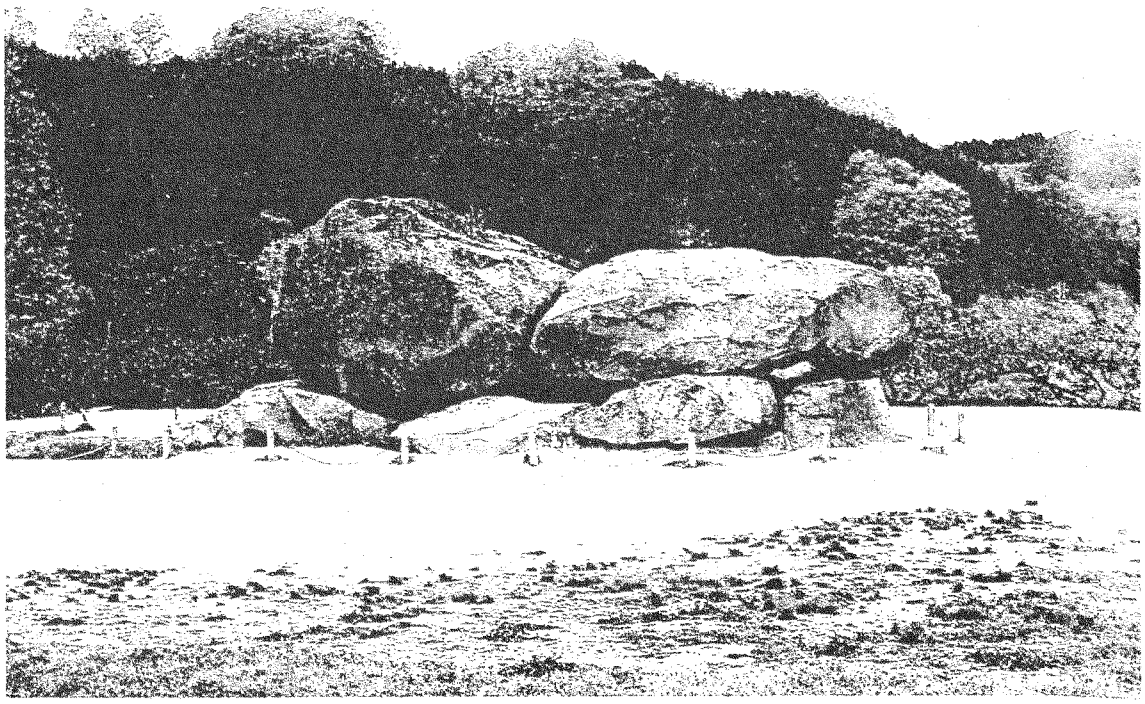
２０周年記念１泊旅行

わが手に国のまほろばを！



石舞台古墳

主催 備陽史探訪の会　　担当 旅行委員会

２０００年５月２０、２１日（土・日）

我が手に国のまほろばを！

備陽史探訪の会１泊旅行探訪コース予定（雨天の場合２日目を若干変更します）

《初日のコース》

福山駅北口集合	６：３５	
福山駅北口出発	６：４０	
福山東ＩＣ着	６：５５	
竜野西ＳＡ着	８：１０	（トイレ休憩。すぐに出発）
竜野西ＳＡ発	８：２５	
香芝ＳＡ着	１０：０５	（トイレ休憩。すぐに出発）
香芝ＳＡ発	１０：１５	
大和郡山ＩＣ着	１０：２５	
筒井順慶墓着	１０：３５	（足立捷一郎さん合流）
筒井順慶墓発	１０：５５	
慈光院着	１１：１５	（抹茶をいただいたあと拝観）
慈光院発	１１：４５	
大納言塚着	１２：００	
大納言塚発	１２：１５	（ここから郡山城までは徒歩で移動）
永慶寺着	１２：２５	（山門だけ見学）
永慶寺発	１２：３５	
郡山城（柳沢神社・逆さ地蔵・柳沢文庫）着	１２：４５	（やや遅い昼食弁当はここで）
郡山城発	１３：４５	
売太神社着	１４：００	
売太神社発	１４：１０	
稗田環濠集落着	１４：１５	
稗田環濠集落発	１４：３０	
額安寺着	１５：００	（本堂修復中。宝物庫を拝観）
額安寺発	１５：２０	
額安寺五輪石塔群（鎌倉墓）着	１５：３０	
額安寺五輪石塔群（鎌倉墓）発	１５：４０	
額田部窯跡着	１５：４５	
額田部窯跡発	１５：５０	（大和郡山市はここで最後）
比売久波神社着	１６：０５	（場合によっては省略。川西町）
比売久波神社発	１６：１０	
島の山古墳着	１６：１５	（場合によっては省略。川西町）
島の山古墳発	１６：３５	
橿原考古学研究所附属博物館着	１７：１５	（特別展開催中。橿原市）
橿原考古学研究所附属博物館発	１８：３０	
千輪荘着	１８：４０	
入浴	１８：５０	
夕食	１９：３０	（２０：３０まで）
就寝消灯	２２：００	

《宿舎》
『橿原市サイクリングターミナル 千輪荘』　〒６３４－０８２６
奈良県橿原市川西町８５５－２
℡０７４４－２７－３１９６

《２日目のコース》

起床	５：５０	（シーツをたたむ）
洗面	６：００	
宿舎前集合	６：２０	
新沢千塚古墳群着	６：２５	（千輪荘の裏山）
千輪荘着	７：２０	
朝食	７：３０	
宿舎発	８：２０	
飛鳥駅着	８：３０	
越岩屋山古墳着	８：３５	（ここから明日香村の史跡探訪）
越岩屋山古墳発	８：５０	
飛鳥駅着	８：５５	
国立飛鳥歴史公園館駐車場着	９：００	
高松塚古墳壁画館着	９：１０	
高松塚古墳壁画館発	９：２５	
高松塚古墳着	９：３０	
高松塚古墳発	９：４０	
中尾山古墳着	９：５０	
中尾山古墳発	１０：００	
飛鳥歴史公園館着（トイレ休憩）	１０：０５	
飛鳥歴史公園館発	１０：２０	（バス乗車県道下車。以下は徒歩）
吉備王の墓（猿石）着	１０：２５	
吉備王の墓（猿石）発	１０：３５	
欽明天皇陵着	１０：４０	
欽明天皇陵発	１０：５０	
鬼の雪隠（せっちん）・鬼の俎（まないた）着	１１：００	
鬼の雪隠・鬼の俎発	１１：１５	
亀石着	１１：２５	
亀石発	１１：３５	
橘寺着	１１：４５	
橘発発	１２：０５	
川原寺跡着	１２：１０	
川原寺跡発	１２：２０	（バス乗車）
石舞台古墳芝生広場着	１２：２５	（昼食弁当はここで）
石舞台古墳芝生広場発	１２：５５	
石舞台古墳着	１３：００	
石舞台古墳発	１３：１５	（バス乗車）
岡寺着	１３：３０	（バス下車県道下車。以下は徒歩）
岡寺発	１３：５５	
酒船石着	１４：１０	
酒船石発	１４：２０	
伝飛鳥板蓋宮跡（でんあすかいたぶきのみや）着	１４：３０	
伝飛鳥板蓋宮跡発	１４：４５	
飛鳥寺着	１５：００	
飛鳥寺発	１５：３０	
飛鳥座（あすかにいます）神社着	１５：３５	
飛鳥座神社発	１５：５０	
飛鳥水落遺跡着	１６：００	
飛鳥水落遺跡発	１６：１０	
甘橿の丘上着	１６：２０	（時間によっては省略）
甘橿の丘発	１６：４５	
雷（いかずち）交差点発	１７：００	（バス乗車。帰路へ）
近鉄畝傍御陵前駅近く着	１７：１０	（足立捷一郎さん下車）
法隆寺ＩＣ着	１７：４５	
香芝ＳＡ着	１７：５５	
香芝ＳＡ発	１８：０５	（トイレ休憩。すぐに出発）
三木ＳＡ着	１９：１５	（夕食休憩）
三木ＳＡ発	１９：４５	
福山東ＩＣ着	２１：４５	

★筒井順慶墓所
（つついじゅんけいぼしょ）

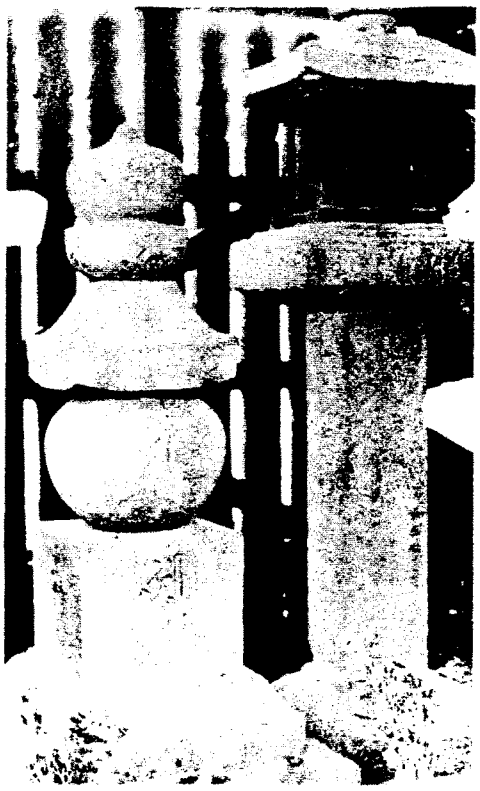
大和郡山市長安寺町にある国重要文化財「五輪搭覆堂」が順慶の墓所である。

順慶は天正１２年(1584) ８月１１日郡山城中で没した。年３６歳。順慶の遺骸ははじめ密かに奈良林小路の円証寺に葬られたが、のち遺骸を掘り起こし、盛大な葬儀の後、長安寺墓所に葬られた。奈良の伝香寺を「位牌堂」と呼ぶのに対し、長安寺町の墓所を「御廟所」と呼ぶ。

覆堂は露盤銘により天正１２年(1584) 前後の造立とわかる。内部の五輪搭には「順慶陽舜房法印三十六歳、天正十二年甲申八月十一日子時入滅」また境内の石灯籠の竿には「天正十三年乙酉八月十一日」と陰刻してある。

建物は宝形造り、方１間の柱の間に貫を渡して板塔婆を目透かしに釘付け、内法長押(ねげし)は連子窓とし、軒は１軒、疎垂(まばらだるき)、本瓦葺の屋頂に宝珠、露盤をおいている。覆堂とはいいながら、実際には本格的な建物で、天正１２～１３年ごろ五輪搭と同時期に建立されたものと考えられる。

石灯籠は旧臣達が順慶の墓所が破損し、荒れ果てていたことを憂いて１周忌に石灯籠を建立し、修理した事が古文書に書き記されている。



《（上）筒井順慶の墓＝五輪塔と石灯籠
（下）五輪塔覆堂（国重文）》

☆筒井順慶（つついじゅんけい）

筒井氏の出自は必ずしも明らかではなく、菅原氏・大神氏・藤原氏等諸説があるが、森屋神社（磯城郡田原本町蔵堂、村屋神社）を中心とした森屋党の森屋筒井が出自ではないかといわれている。その出自が明確でないのは、中世動乱期に台頭してくる豪族の常であるが、筒井氏の場合はかなり早くから（おそらく平安末期ごろ）興福寺の寺中衆徒となったことにもよるともいわれる。

筒井氏は鎌倉末期から室町初期ごろに、筒井の地を根拠としてしだいに頭角を表し、近隣の弱小豪族を糾合して党を組み力を蓄え、さらに南北朝期一乗院と大乗院との抗争に乗じて勢力を伸ばしたという。また、室町幕府は筒井氏を衆徒の棟梁として「官符衆徒」とみなし、南朝の余党に当らせたため大和国で南朝方の越智氏と争うこととなった。この戦いを「永享大和の合戦」という。当初、越智氏に敗れるが、その後幕府の援助にも助けられて勢力を盛り返した。筒井氏もまた他氏と同様に惣領争いを経たり、河内畠山氏の内訌（ないこう）に関わるなど盛衰を繰り返しながら勢力を拡大していった。

《筒井順慶画像（左）と花押（右）》

順慶は、父順昭、母は大仏再興に功績あった山田道安の妹の長男として天文１８年(1549)３月３日生まれた。幼名は藤勝、のち藤政、得度して陽舜坊順慶と称した。天文１９(1550)年２歳の時、父順昭が早逝し、家督を継いだ。叔父順政、生母の大方が後見となり、一族重臣も一致協力、順慶を補佐し盛り立て大和統一の業を成させたという。

なお、「元の黙阿弥」という諺の語源は、順慶の父順昭の遺言より発したといい伝えられている。すなわち、順昭の病死を秘して顔や声のよく似た木阿弥という盲人を替え玉とした。３年後（一説に順慶の成人後）にその死を公表、木阿弥は不要となって再び市井の人に戻されたという話から出たものである。

順慶が家督を継いだころは室町幕府の弱体化による政情不安を大和も受け、松永久秀の侵入を受けるなど国内の平定に腐心し、のち織田信長の助力を受けて天正元年(1573)、１２月多聞山城に松永久秀を破り大和を平定した。その後久秀は天正５年(1577)再度信貴山城にこもり反旗をひるがえすが、これを攻めて滅亡させた。

織田信長の上洛後、順慶は信長に忠誠を誓い、母親と重臣の向井、井戸の両人を人質として送り、信長もそれに応えて信長の女とも妹ともいわれる女人を順慶に娶らせたという（天正２、３年ころ）。信長の信頼は厚く、盟約も固いものであったようである。このころ石山本願寺と石山合戦が始まり、順慶も信長方の先鋒として大和の国人を率いて参戦しており、この合戦で大和守護についていた塙（はなわ）九郎左衛門、原田備中守直政をはじめ織田方武将の多くが討ち死にし、その結果順慶は信長の代官として大和を自分の勢力圏とすることができたといわれる。

信長は中世封建制に基づく秩序を解体し、新しく近世封建制の確立を目指して当時の言葉で「城割」「指出」と呼ばれた政策を大和でも押し進めたため、各地の城館、山城の破却、各勢力の所持する不動産の高が明らかとなり、大和にも近世封建制が進む基となった。順慶も信長配下として、それまでの筒井城を破棄し、郡山城に入城する。

天正１０年(1582)６月２日早朝、明智光秀の謀反により信長は京都本能寺で倒される。のちの豊臣秀吉すなわち羽柴秀吉は、同年備中高松で毛利氏と交戦中であったが、和議を整え引き返し、京都山崎で明智光秀と戦って大勝利をおさめた。この時順慶は両軍からの助力を請われるが、順慶は光秀の子を養子に迎えるなどの縁もあり、当初光秀方とみられていたが、山城八幡山洞ケ峠(ほらがとうげ)に陣を張り動かず、合戦の戦況を見極めた後、明智勢の敗戦濃厚となってから秀吉方に加担したといわれ、後世「順慶流日和見主義」とか「洞ケ峠を決め込む」などといわれるようになった。

しかし、事実は違っていたようである。本能寺の変後の正確な情報の入手の遅れ等により、家中の意思統一が遅れている間に秀吉の軍勢は東進し、６月１３日に山崎の戦いで光秀を破ってしまった。あまりの速さに筒井の態度表明が遅れたのが実情といわれる。同月１５日には順慶自身、千人の軍勢を引き連れて駆けつけたという。この時秀吉から日和見的な態度を曲事と叱責されたが、のち許され大和一国を安堵された。その後順慶は秀吉に従い各地を転戦し、筒井の名を高めた。筒井本宗家の家系は次の通りである。

筒井順覚―順弘―順永―順盛―順興―順昭―順慶―定次（改易後切腹、断絶）

★慈光院(じこういん)

臨済宗大徳寺派、山号は円通山。

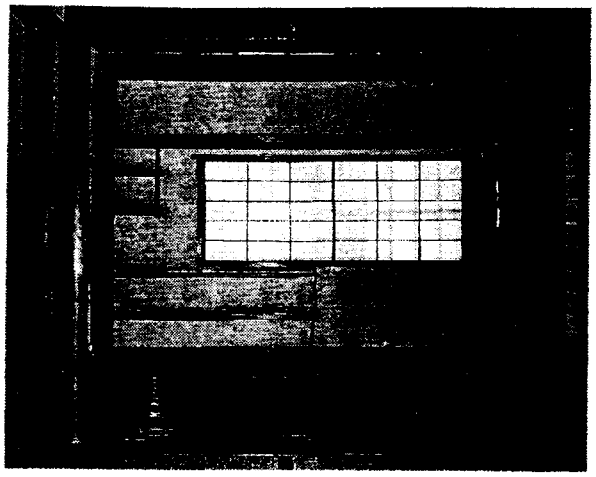
寛文３年(1663)、小泉城主片桐貞昌(かたぎりさだまさ)が父貞隆の菩提を弔うため、京都大徳寺の玉舟(ぎょくしゅう)を開山に招じて創建した寺である。片桐貞昌は、片桐且元(かつもと)の甥で、茶道石州流の祖として知られ、寛文５年(1665)には４代将軍徳川家綱の茶道師範となった。

寺としてよりも大名茶人好みの書院・茶室と、大和平野を借景とした庭園で有名である。入母屋造、茅葺きの素朴なたたずまいをみせる書院の内部は、上の間・中の間・下の間からなり、上の間は大名、中の間は家老・住職が席を占めることになっていたという。書院の北東隅にある茶室は、二畳台目の本席に、二畳の控えの間付きで、主人床の席として知られる江戸中期の代表的な茶室である。書院の縁先にある「角(かど)ばらず」「独座」「女(め)の字」と名付けられた三つの手水鉢(ちょうずばち)も名高く、書院・茶室は国重要文化財に、手水鉢も付指定となっている。

書院の庭園は枯山水だが、石組を用いず、白砂を前にした大刈込みを配しただけのものである。大和盆地を一望に収める雄大な借景が見事で、いかにも大名茶人の庭園らしい風格があり、国の史跡・名勝に指定されている。な

なお、寺の楼門は片桐且元の居城した茨木城（大阪府）の城門を移したものである。

《慈光院》



《慈光院茶室》

★慈光院庭園（じこういんていえん）

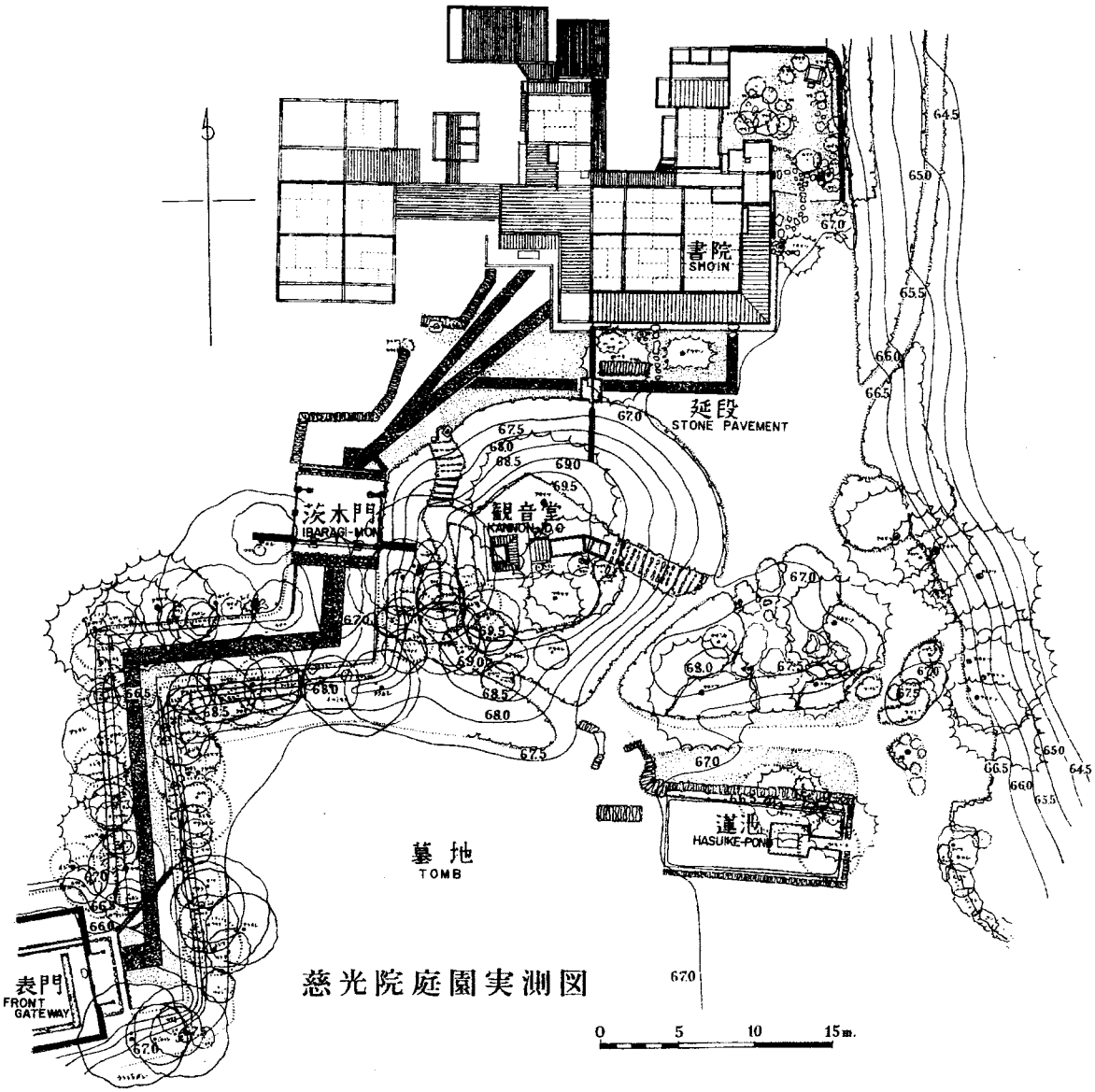
慈光院の庭園は、片桐貞昌が構えた草庵の書院の側に瀟洒（しょうしゃ）な数奇屋があり、その東から南前面に展開している。

表門から茨木門（中門）、さらに玄関、庭門、書院南縁前面に終る畳石道の構成は、付近から産出した素朴な石を用いていながら巧妙に仕上げられている。

庭園のうち南面は緩い勾配（こうばい）で隆起し、そこを雄大なつつじの大刈込が覆っているが、その間に捨石の姿が点在するところをみると、昔は枯山水の石組の下草的に植栽されたものが、生長しすぎて現在の姿になったものと思われる。

また東側の平庭の先端に低い刈込生垣を設けたのは、その前面の地形が低く傾斜していて、前方には農村風景が展開しており、その向こうには奈良の東山連峰が望まれる、すばらしい借景庭園としての効果を計算しての設計である。

国史跡および国名勝に指定されている。



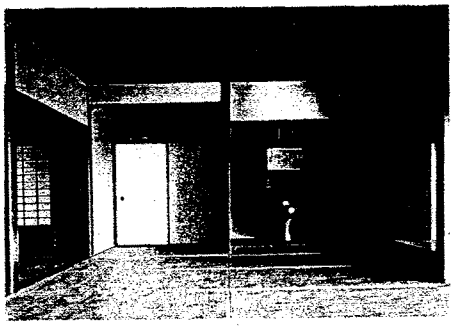
慈光院庭園実測図

★慈光院茶室（じこういんちゃしつ）

慈光院は寛文３年(1663)にまず書院（方丈）が建てられ、寛文１１年(1671)に茶室が造られた。現在本堂は失われたが、書院・茶室ならびに庭園がほとんどその当時のまま残っている。

茶室は２畳大目で、東に躙口（りんこう、踏み口）を開き、南に茶室に接して２畳２畳の間がある。躙口を入ると大目溝が見え、その奥にいわゆる亭主床がある。２畳との境は襖引き違いで、襖を取り払うと２畳相伴席となる。

この茶室は書院の東北に附属しており、書院の北側の縁から直接茶道口にに通じるようになっているが、もとは茶道口の外に勝手・水屋が付いていたと考えられる。



《慈光院茶室》

石州は京都や小泉の屋敷にいくつかの茶室を造っているが、すべて失われ、この慈光院茶室がその好みを伝える唯一の遺構である。

★片桐石州（かたぎりせきしゅう）

江戸時代前期の大和国小泉藩主、茶道石州流の開祖。幼名長三郎、のちに貞俊、さらに貞昌と改め、宗関と号し、浮瓢軒と称した。

慶長１０年(1605)、摂津国に生まれる。父は貞隆、母は天野氏。寛永元年(1624)従五位下石見守（「石州」はこれによる）を任官、寛永４年(1627)遺領をつぎ小泉藩主となった。幕命によって京都の知恩院の諸堂再建につとめ、また関東の郡奉行をつとめたり、水損地の実情調査に従事したこともある。

石州は茶道を桑山左近宗仙に学び、寛文５年(1665)４代将軍徳川家綱の所望によって、江戸城御数奇屋において点茶を将軍に献じ、かつ将軍家の茶器を鑑定した。以後寛文８年(1668)に職を辞すまで、将軍家の茶道宗匠をつとめた。このことによって、村田珠光・武野紹鷗・千利休・古田織部・小堀遠州と数えられる茶道六宗匠の一人となった。

《片桐石州画像》

彼は絵にもすぐれた文化人であったから、茶道宗匠としても大きな影響力をもち、やがて仙台伊達をはじめ、会津松平・信発田溝口などの大名を石州流に化せしめるに至った。石州の制定した「石州三百ケ条」は同流の晴天であり、寛文５年将軍献呈の節に石州がこれを茶湯覚書きとして上申したものとされてきた。しかし、「無住抄」前書などによって考えると、この三百ケ条は千利休から千道安を経て桑山左近に伝わった茶の湯を、石州が随時記録して置いたものをもとにして、それを高弟桑山可斎と大渓宗悦が合議によりまとめたものである。

のちこの石州流から宗源派・清水派・鎮信派・野口派・大口派・大渓派伊佐派・不昧派などが分流した。そのため三百ケ条も各分派独自の解釈によるさまざまな展開をとげた。この石州流は諸大名やその家臣たちの武家社会に流行したため、武芸諸流と同様に印可証明を与えられたものは伝授権をもあたえられ、近代に至るまで、千家流のように伝授権を独占した家元制度社会を構成することはなかった。

石州は茶人として大徳寺の玉室和尚に参禅氏、道称の法名を与えられ、同寺内に高林庵という一寺を建立した。延宝元年(1673)小泉で没した。６９歳。高林院に葬られる。

☆片桐氏と小泉藩（かたぎりしとこいずみはん）

片桐氏は清和源氏を称し、一説には信濃国伊那郡の出身とも伝えられる。直貞のころには近江の浅井氏に属しており、その子且元（かつもと）・貞隆は豊臣秀吉に仕えた。

①大和国竜田藩主の且元は文禄４年（1595）大名となり、大坂の陣後４万石で大和竜田に住した。寛永１５年（1638）且元の子の孝利に子が無かったので、弟の為元が跡を継いだが、この時一万石に減封された。元禄７年（1694）貞就の死去により無嗣絶家となった。

②大和国小泉藩主の貞隆は関ケ原の戦いののち、徳川家康から一万石を与えられて大名となり、大和小泉に住した。元和元年（1615）１万６４００石に加増される。子の貞昌（石見守）は茶道・花道にすぐれ、石州流の祖となる。代々柳間詰で、貞篤のとき明治維新となり、明治１７年（1884）貞健の時、子爵を授けられる。

《片桐且元画像》

小泉藩は、大和国小泉（奈良県大和郡山市）を藩庁とした外様藩である。藩祖は片桐且元の弟貞隆で、関ケ原の戦後、豊臣秀頼から大和に５７００余石を加増されてはじめて万石の列に加わり、大坂冬の陣の半年前、河内・摂津に５千石を加えられて１万５千石余を領した。大坂落城後、江戸幕府から所領を安堵され、元和９年（1623）小泉の地に陣屋を構えて摂津茨木から移り、小泉藩の成立をみた。寛永４年（1627）その子石見守貞昌が家督相続の際、弟貞晴に３千石を分知した。貞昌は宗閑と号し、石州流茶道の祖として有名で、寛文３年（1663）陣屋の近くに慈光院を建てている。

３代貞房のとき、事あって与力給１３５８石余が召し上げとなり、藩領は大和の６千石余のほか、河内・和泉・摂津・山城に散在して、つごう１万１千石余となった。以後、貞起・貞音・貞芳・貞彰・貞信・貞中・貞照と相継、１１代貞篤のとき、明治４年（1871）廃藩置県。いったん小泉県となり、奈良県に統合された。

★大和郡山の古墳
（やまとこおりやまのこふん）

①郡山新木山古墳（こうりやまにきやまこふん）

別名、丸山古墳ともいう。大和郡山市新木町に所在する南向きの前方後円墳。

平坦地に位置する古墳の中では大形のもので、全長１２２．５ｍ、後円部径６７ｍ、前方部幅７５ｍをそれぞれ計測する。墳丘周囲には馬蹄形の堀が認められる。現在、墳丘の北西に県道が通り、この部分が破壊されている。

墳丘部分は、宮内庁により郡山陵墓参考地として管理されている。そのため埋葬施設、遺物等については全く不明である。

《郡山新木古墳》→

②小泉大塚古墳（こいずみおおつかこふん）

大和郡山市小泉町大塚にある。矢田丘陵の東南部の北東にのびた尾根上に位置する西面する前方後円墳である。

墳丘全長約８０ｍ、前方部の幅約４０ｍ 、同高約２ｍ、後円部の径は５０ｍ、同高約７ｍ。埴輪や葺石の外部施設はない。現在、宅地開発により前方部と後円部の周辺が採土され、円墳のような見かけになっている。

昭和３７年(1962)の発掘調査の時、後円部頂に断面が合掌形の竪穴式石室が検出された。出土遺物としては内行花文鏡２面・獣帯鏡１面・剣１口・鉄小刀１口・刀子２・鉇１・鑿(のみ)１・短冊形鉄斧１・土師器壺が出土している。出土遺物から４世紀前半の築造と考えられ、大和郡山市内では最も古い古墳であり、矢田丘陵では数少ない古墳時代前期の古墳として注目されている。

なお、『大和名所図会』には「赤檮(いちひ)墓小泉村にあり、赤檮は物部守屋を射たりし人也」とあって、この古塚が赤檮の墓と伝えられていたことがわかる。

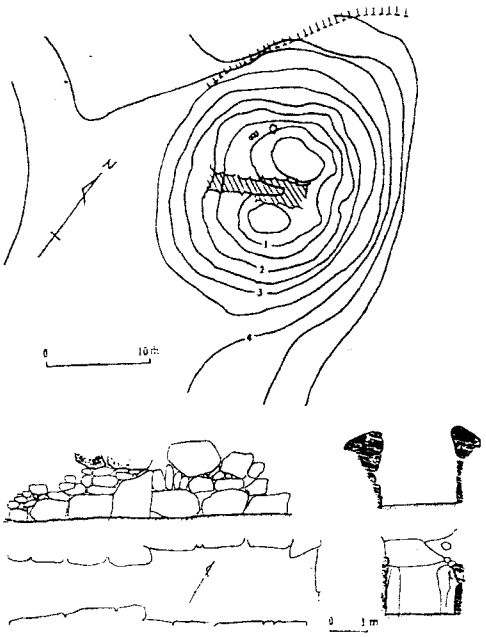
③小泉狐塚古墳（こいずみきつねづかこふん）

大和郡山市小泉町狐塚に所在。矢田丘陵の位置尾根の先端に位置する円墳である。

調査によれば、南北径約２３ｍ、東西径約２１ｍ、高さ約３．５ｍである。墳頂中央部には陥没箇所があってすでに盗掘されていた。葺石、埴輪は認められない。内部構造は横穴式石室で、西方に向かって口を開き、天井石の多くはもち去られ、内部は攪乱(かくらん)されていた。

基底部と側壁石から、石室の全長９．２ｍ、羨道部長４．２ｍ、幅１．２ｍ、高さ１．４ｍ、玄室長４．８ｍ、奥壁部幅２．２ｍ、現存高２．２ｍと確認されている。

出土遺物としては鏡１・金環４個・須恵器高坏３・蓋坏８・短頸壺１・轡(くつわ)金具片等があり、おびただしい骨片や骨灰、歯なども出土した。また、富寿神宝（皇朝十二銭の一つ）６個が混在し、のちに墓地として石室内が再利用されたことがわかっている。この古墳は出土遺物から古墳時代後期６世紀後半の築造と考えられている。



《小泉狐塚古墳の墳丘と石室》

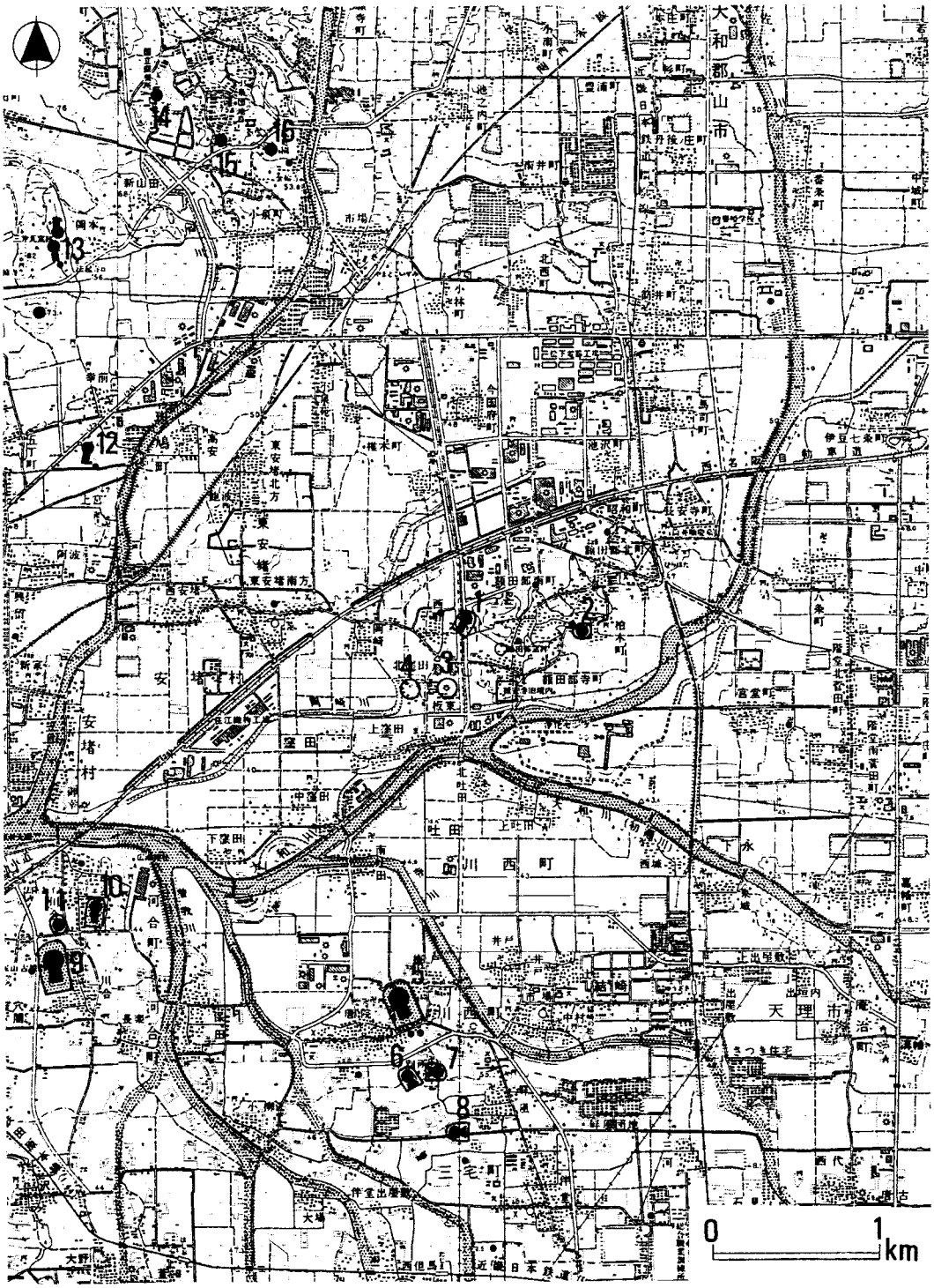
④六道山古墳（ろくどうやまこふん）

大和郡山市小泉町六道にある。矢田丘陵の南東裾部、北西から南東方向にのびる丘陵端に立地し、前方部は北西を向いている。墳丘の主軸全長は約１００ｍ、後円部の径約７５ｍ 、高さ約１４ｍ、前方部の幅約５０ｍ、同高約８ｍの後円部２段築成の前方後円墳であるが、前方部が短いので帆立貝式古墳とする説もある。埴輪や葺石は確認されていない。築造は古墳時代中期（５世紀初め）と考えられている。また、六道山は慈光院のすぐ南にあるで慈光院山ともいわれている。この古墳も前方部が駐車場と化し、見かけは円墳のようになっている。

なお、明治２６年(1893)の『大和古墳墓見取図』には、この古墳について「古墳墓反六畝廿五歩（８００㎡） 官有地」とあり、また「官林 高三間（約６．３ｍ） 根廻り五十五間（約９９ｍ）」とある。

⑤額田部狐塚古墳（ぬかたべきつねつかこふん）

額田部南町に所在する前方後円墳。平坦地に造営されて周濠があったと思われる。



1.額田部狐塚古墳　2.松山古墳　3.来迎墓ノ間古墳群　4.上窪田古墳群
5.島ノ山古墳　6.寺ノ前古墳　7.11－A－9　8.高山古墳　9.河合大塚山古墳
10.城山古墳　11.丸山古墳　12.駒塚古墳　13.瓦塚古墳
14.笹尾古墳　15.小泉大塚古墳　16.六道山古墳

墳丘は全長約５０ｍ、前方部の幅約３６ｍ、後円部の径約２６．５ｍ、同高５．５ｍであり、また、円筒埴輪列が確認されている。

昭和４１年(1966)１月の発掘調査では後円部に２つの木棺が確認された。その１つに冠帽とみられる金銅片と、それに付着したガラス玉や、琥珀玉と銀製中空玉とが交互に連絡した頭飾、銀製中円玉のみの頭飾、鏡、直刀、環頭剣、挂甲、馬具等が出土した。もう一方の棺からは管玉、銀環、約５０あまりの長頸式の鉄鏃が一括して埋められていることが明らかになった。

両棺とも黒青色の粘土上に置かれており、棺上は黄褐色粘土をもって覆ってあり、黒青色粘土、黄褐色粘土の状態からみて同時埋葬考えられる。この古墳は出土品などからみて６世紀前半の築造と推定されている。

★大納言塚（だいなごんづか）

大納言塚とは、大和郡山市箕山町にある市指定文化財の豊臣秀長の墓所のことである。秀長は天正１９年(1591)１月２２日、郡山城中で没し、遺骸はここに葬られた。

当初、大納言塚は東南の近地「芦ヶ池」畔に豊臣秀吉により建立された「禅寺山大光院」が秀長の菩提寺となり、その管理を行っていた。大光院は豊臣家滅亡後、もと秀長の家臣藤堂高虎の手により京都大徳寺の搭頭として移され、塚は荒廃の極みとなっていたが、元和五年(1619)ころに供養搭のみが建立された。

《大納言塚》

秀長の位牌は東光院に託され、秀長の法名により春岳院と改められて、位牌所菩提寺として秀長の菩提を弔っている。春岳院には豊臣秀長の肖像画を始めとする関係古文書多数が伝わるが、大納言塚の保護にまでは手がおよばなかったが、江戸の中期に「春岳院栄隆法師」の発起により、爾来２０年余の歳月と２代の住職、町衆らの尽力により安永(1777)６年修築整備が完成し、今に伝わっている。

☆豊臣秀長（とよとみひでなが）

豊臣秀長は、織田信長の茶坊主をしていたともいう。父竹阿彌と秀吉の母なかの子として天文９年(1540)に生まれ、初め小一郎長秀と名乗り、のちに秀長と改名した。異父兄秀吉の片腕として各地に転戦し、秀吉と家臣団の仲立ちとなって豊臣家臣団の信頼篤く、家臣から慕われていたという。また各大名との外交交渉、軍資金調達等、秀吉の全国平定に大きく寄与し、徳川家康、大友宗麟、毛利、吉川、小早川等の諸氏も郡山を訪れるなど、名宰相として敬意をはらわれた。

さらに郡山城下の発展にも力を注ぎ、奈良での各種の商いを禁じ、郡山城下での商いのみ許可し、「箱本十三町」の元となる制を認めるなど、城下の賑わいに意を注いだ。家臣にはのちの徳川期にも名を残す、藤堂高虎、小堀新助正次等の名がみえる。

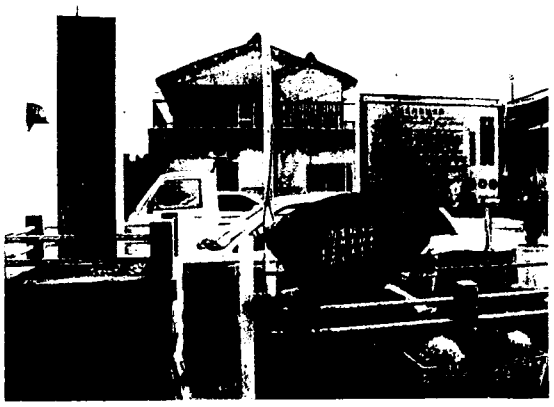
《豊臣秀長画像》

秀長は天正１８年(1590)小田原征伐の頃より健康を害した。同年１０月１９日、秀吉が自ら見舞い、奈良中の社寺に病気平癒を祈願させたが、その甲斐もなく天正１９年(1591)１月２２日城中で没した。享年５２歳。秀吉の落胆は大きく、のちの豊臣政権の姿をみるとわかるように、政権内での秀長の重要さがそのまま豊臣政権の消長に大きく影響したといわれている。

法名は「大光院殿前亜相春岳紹栄大居士」。秀長には嫡子がなく、三好吉房と秀吉の姉ともの子、関白秀次の弟、秀保を養子として跡目を継がせた。秀保は秀吉から所領を安堵され、天正２０(1592)年権中納言となった。家老桑山一庵法印、藤堂高虎等の補佐により善政をしいたというが、惜しむらくは文禄４年(1595)４月早逝した。享年１７歳。

☆近世以前の大和郡山（きんせいいぜんのやまとこおりやま）

大和郡山市は奈良盆地の北部に立地し、北から東は奈良市に、南東は天理市に、西は生駒市と生駒郡斑鳩町・安堵村、南は磯城郡川西町に接している。西ノ京丘陵の南端に構築された郡山城を中心とし、南流する佐保川・富雄川の流域に開発された地域である。



《平城京西市跡の碑》

現大和郡山市の市街地は、古代の平城京朱雀大路を南下した羅城門前、典薬寮（薬草園＝薬園）の地であったと伝えられる。平城京の遺跡として東市（奈良市）ともに大和郡山市内に日本最初の官営市場、西市があったと推定されている。

また、薬園（矢興、野興とも表記）は古代、ヤコウと称し、中世郡山衆の中にもその名がうかがえる。郡山城天主台北側の左京堀は、南京極道路南側の堀跡、東奈良口町・西奈良口町・観音寺町は平城京右京一坊大路の名残、また九条町は平城京西市と伝えるなど、古代奈良の都「平城京」の一部をも含むといわれている。天平時代には、薬園宮・梨原宮・殖槻寺・高田寺・観世音寺・額安寺金剛山寺・松尾寺などの諸宮、諸寺院が建立されており、古代王朝国家との繋がりも深い地といわれている。

中世期には南都奈良に接していることにもより興福寺・東大寺・薬師寺等の寺院勢力の侵蝕を受け、しだいに寺院の荘園と化していったようである。とくに平安後期摂関政治等の影響を受け、藤原氏の氏寺である興福寺の力が強大となり、大和においては公領がほとんど姿を消し、寺領荘園となった。

鎌倉期にいたると興福寺の勢力は一段と強まり、薬師寺でさえ末寺とし、東大寺領荘園等を侵蝕していった。鎌倉幕府も大和には守護・地頭を任命できず、興福寺が事実上、守護権を行使するようになる。しかし、やがて建武の親政をへて南北朝期を迎えるころになると、興福寺の力がしだいに衰え、衆徒等の中には力を蓄えて独自の行動をとるものが出てきた。

寺門の力が衰えるのに比例して衆徒、国民、その両方に属さない地侍等が実力を蓄え同族組織の形で共同して事に当ろうとするようになる。これが何々衆・何々党と呼ばれるものである。すなわち郡山衆・法貴寺党・楊本衆・森屋党・八条党・竹田党等が初期の衆党であるが、さまざまな争乱をへて南北朝期になると、これらの衆党は勢力を拡大しながらより強い衆党に再編される。その後、応仁の争乱に巻き込まれてさらに統合が進み、筒井党・越智党の二大勢力に集約されるようになる。

そして最終的には天正年間の初め、織田信長の援助を受けた筒井順慶により大和国は

筒井氏の領分として統一。大和郡山に本城が築城され、大和の政治・軍事の中心地となり近世を迎えるのである。

時が移り本能寺の変で信長が倒れた後、豊臣秀吉により筒井氏は大和郡山から伊賀に移された。その後へ秀吉の異父弟豊臣秀長が入り、短命であるが大和郡山の祖を築く。その後は増田長盛（ましたながもり）が入部、江戸時代に入って空白期間を置いて水野勝成・松平忠明・本多正勝・松平信之・本多忠平と城主が変わり、享保９年（1724）柳沢吉里が甲府より国替えとなり入城し、以後１４７年間明治維新まで柳沢氏の統治が続いた。

★郡山城（こおりやまじょう）

《復元された郡山城隅櫓》

郡山城の前身は中世前期に名主層の中で地侍化した土豪、その中の郡山八幡宮の氏人衆を郡山衆といい、その衆の屋敷地という。この郡山衆が犬伏丘ともいわれる現郡山城の立地する丘陵上に、それぞれ屋敷を構え、館を築いたのが始まりと伝えられる。

中世の土豪である郡山衆の「中殿・辰巳殿・薬園殿（矢興殿）」の屋敷である三つの館を核として、中でも薬園殿の館を中心とし薬園・郡山の両地区を含めて城地とし、筒井順慶により築城されたと伝えられる。当初は本丸と二の丸だけで石垣は構えず、切り岸と堀のみであったようだ。また、二の丸には宿老衆をはじめ、家臣百姓等が混在して居住していたようである。

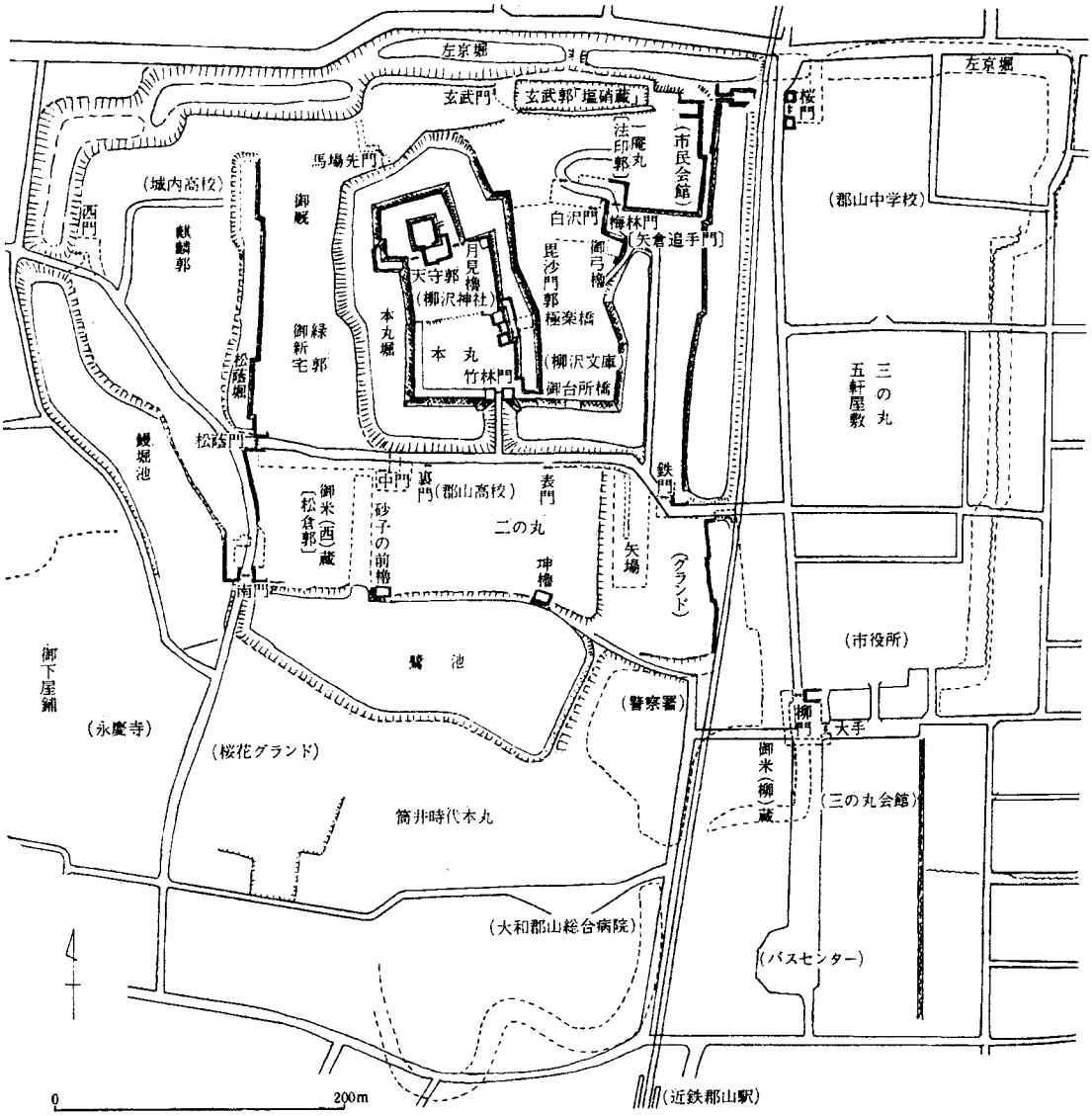
天正８年（1580）８月、織田信長の一国一城令の命により筒井氏の本城である筒井城を破棄し、同年１１月信長より大和一国を与えられ本格的な築城に取り掛かり、明智光秀の同国見回りを受けて構築を急いだ。天正１１年（1583）本能寺の変後の４月、天守閣を急造したと伝えられる。

筒井順慶の死後、養子の定次は伊賀へ国替えとなり、その後へ但馬国出石から豊臣秀長が天正１３年（1585）９月入部し、大拡張修築をしたと伝える。秀長時代に大拡張が行われ、現代に伝わる天主台を始め、本丸・毘沙門郭・法印郭（一庵丸）・二の丸・キリン郭・緑郭・玄武郭・五軒屋敷・三の丸等、内堀の内側に配置された各郭が秀長時代に構築されたといわれる。築城は大規模で性急な構築方法で行われたようであり、奈良中の家並に五郎太石を出させ、その上大寺院にまで手を伸ばし、礎石・庭石を始め多くの石造物も収奪したと伝えられる。天主台やその他の各郭の石垣に平城京羅城門の礎石を始めとして、多くの石地蔵・五輪塔・庭石・供養塔等のありとあらゆる石造物が石垣の用材として使われている。

豊臣氏は紀州根来衆（ねごろしゅう）を壊滅させ、根来寺（ねごろじ）の大門を淀川経由で郡山に運び、郡山城の大手門として移築使用したという。文禄４年（1595）４月秀長の養子秀保が没し、郡山豊臣家は２代で断絶。同年７月豊臣政権の五奉行の一人増田長盛（ましたながもり）が入城した。長盛は郡山入城の翌年から惣堀の構築にかかり秋篠川の流路を東に変えて佐保川に流し、その川床を堀として流用するなどして外堀を完成させ、郡山城は筒井順慶の入城より約２０年を経過して完成したと伝えられる。

増田長盛は慶長５年（1600）の関が原の戦いで西軍に味方して没落、その後、郡山城は徳川氏によって接収取り壊され、伏見城に移築されたという。ここに郡山城は一たん廃城となって徳川方の城番の詰めるところとなった。元和元年（1615）水野勝成が入部し、幕府の手も加わり修築、再築された。以後松平・本多・松平・本多・柳沢と明治を迎えるまでつづく。

《郡山城主要部》



筒井家	豊臣家	増田家	廃城	水野家	松平家	本多家	松平家(第二次)	本多家(第二次)	柳沢家
一五八〇(天正八) 一五八五(天正一三)		一五九五(文禄四)	一六〇〇(慶長五)	一六一五(元和元) 一六一八(元和四)		一六三九(寛永一六)	一六七九(延宝六) 一六八五(貞享二)		一七二四(享保九) 一八六八(明治元)
5	10	5	(15)	3	21	40	6	39	144

《郡山歴代藩主と在藩年数》

★逆地蔵（さかさじぞう）

郡山城天守台北面の石垣の中に積み込まれた石造地蔵菩薩立像が、逆さに積まれているのでこの名がある。

地蔵は左手に宝珠を持ち、右手に錫杖を持っている。仏身は約９０ｃｍで、「大永３年（1523）癸未（みずのとひつじ）七月十八日」の刻銘がある。豊臣秀長が郡山城を百万石の大名の居城としてふさわしいように造り替えるとき、石材不足のために運び込まれたものと考えられている。

しかし最近では、天守台にわざわざ逆さに地蔵像を組み込んだのは呪術的な意味があることを指摘する学者（小和田哲男氏等）もいる。

《逆地蔵》

★柳沢文庫（やなぎさわぶんこ）

柳沢文庫は正式名を「郡山城史跡・柳沢文庫保存会」という。

柳沢家からの地所と旧郡山藩の資料の寄附によって設立されたものである。事業目的は郡山城址管理整備、資料の整理、保存、研究、収集等とされている。新潟県黒川の柳沢支藩出自の柳沢保恵によって開設された私立図書館柳沢文庫が前身といわれ、昭和３５年１０月１０日財団法人となり初代理事長は柳沢保承氏である。

《柳沢文庫》

★梅林門（ばいりんもん）

豊臣秀長時代の大手門（追手門とも）といい伝われており、現在の建物は昭和５８年（1983）１１月、発掘調査、史料調査、全国の遺存城郭データ等をもとに復元建築されたものである。

梅林門の名の由来は、柳沢氏が甲府より郡山城主となり入城したことによって甲府城にあった梅林門・松蔭門・松竹門等の呼びなれた呼称を使ったのが始まりと伝える。また、城門に柳沢氏が「梅林」の名を冠したのは、中国の故事によるという。

秀長時代は惣構えの構築はなされておらず、梅林門が豊臣氏時代の大手にあたると考えられる。関が原の戦い後、城が壊された時、大手門も壊されて京都伏見城の再建資材として運び去られ、元和５年（1619）１１月、松平忠明が郡山城主として入城後、再び幕命により伏見城から移築再建された。

《梅林門》

陣甫郭を北上して左に折れ、梅林門前面に達し、梅林門を通り、一庵丸または毘沙門郭に通じている。この門は門の前後に枡形を配している桝形門形式である。なお梅林門の前から柳沢文庫へ直行する道は、近代になり石垣を破壊して造られたものといわれている。郡山城の建造物で今に残り伝わるものとしては永慶寺の山門がただ一つといい伝えられている。

★柳沢神社（やなぎわさじんじゃ）

城内町本丸跡にある。祭神は柳沢吉保。旧藩士の手によって明治１３年（1880）１０月２９日創建された。

本殿は一間社流造、拝殿は割拝殿となっている。拝殿入口の扁額「柳沢神社」の４字は有栖川宮熾仁（ありすがわのみやたるひと）親王の揮毫（きごう）である。

本殿の東側に、最後の藩主柳沢保甲侯の頌徳碑が立っている。旧家臣が保甲侯の懿徳（いとく）を偲び明治３０年（1897）に建立したもので、碑面には藩主はよく民の生育に努め「仁政また久し」と刻まれている。

この地は台地形をなし、天守台は高く、東に春日若草の山々、その麓には大仏殿二月堂を拝み、北には薬師寺の二つの塔が目に入る風景絶佳の地である。

《柳沢神社本殿》

☆柳沢氏（やなぎわさし）

大和郡山の柳沢氏とは、世に「犬公方」といわれた５代将軍綱吉の側用人として老中にまで出世した、悪評高いあの柳沢吉保を生んだ柳沢氏である。

柳沢氏は甲斐源氏の流れといわれる武田および一条両氏の支族で、甲斐国巨摩郡武川筋の柳沢から起こったとされる。この武川筋周辺に勢力をもつ集団を、武川１２騎また時代によっては武川２４人衆ともいわれた。この中に一条氏の末葉で、青木尾張守信定というものがおり、吉保の祖父信俊の時代に故あって柳沢氏を継ぎ、柳沢を名乗ったという。この武川衆の中に青木氏・柳沢氏一族もおり、武田家武士団の一郡を形成していた。

武田家滅亡後、柳沢氏は徳川氏に仕えた。徳川氏江戸入府に従った吉保の祖父信俊は、徳川氏の領内武蔵の国鉢形今市村で２３０石を知行した。信俊の跡目は長男安吉（信文）が継ぎ、弟安忠は兄安吉に代わって大阪の陣に弱冠１４歳で参加し、将軍秀忠に賞されている。安忠は兄安吉とともに大納言忠長に仕え、忠長改易後は館林藩主綱吉に仕えた。この安忠が吉保の父親であり、安忠は綱吉の許で勘定頭を勤めた。

吉保は家督を継いだ当初は保明と名乗っていたが、綱吉が５代将軍となり、綱吉の信任厚い保明は９万２千石の大名となって川越城主となり、綱吉より松平の姓と吉の字を許され「松平美濃守吉保」と名乗った。

《柳沢吉保画像》

吉保はとかく世評が良くないが、川越城主時代領内に善政をしき、領民から慕われていたという。たとえば、武蔵国入間郡三富村１千町歩を開拓して２４１戸の農家を入植させ、５年間の税免除を行うとともに、この開拓に重臣自らが住まいして開拓の指揮に当る等、善政を施したことが三富山多福寺の鐘銘に記されている。

吉保４７歳の時、宝永元年(1704)１２月甲府城主となり、１５万１千石余、実質２２万石の大名となり、宝永６年正月将軍綱吉が死去したことにより６月隠居し、同月幕府から遺領を安堵され、嫡子吉里に家督を譲っている。

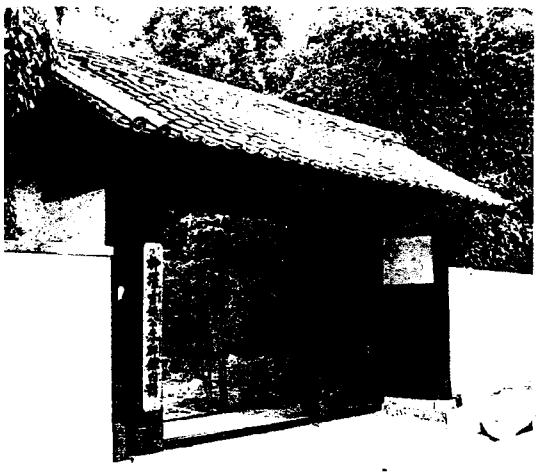
吉里ははじめ越前守・伊勢守を賜り、のちには従四位下甲斐守に任官。享保９年(1724)大和郡山に移封される。郡山移封後は禁裏守護の任も申し渡されている。吉里は父吉保が甲斐国山梨郡岩窪村に菩提寺として建立した「竜華山永慶寺」を郡山に移築建立したという。

永慶寺山門は元は郡山城の城門を移築したもので、大和郡山市の指定文化財になっている。柳沢氏は吉里・信鴻・保光・保泰・保興・保申と６代の間、１度も養子を迎えることなく、郡山城主として明治維新をむかえた。

★永慶寺山門（えいけいじさんもん）

永慶寺は大和郡山市永慶寺町にある黄檗宗の寺院、山号は龍華山。本尊は釈迦如来。開創は寛永２年(1625)、開基は柳沢吉保で、その出身地である甲斐国山梨郡岩窪村（現甲府市）に創建した霊台寺に始まるという。

宝永７年(1710)寺号を永慶寺と改め、黄檗宗８代悦峯道章を招いて開山としている。その後５代将軍徳川綱吉の没後、国替えとなり、享保９年(1724)本多氏の菩提寺法光寺を他に移し、その跡地に永慶寺を移築した。



《永慶寺山門》

堂宇は本堂・開山堂・方丈・弁天堂・楼門・鐘楼・御影堂等がある。ことに山門は郡山城築城の時、秀長によって建てられた城の南門を移築したものである。木造切妻桟瓦葺黒塗で、本柱の一方は脇戸が付き、一方は壁である。桃山建築の豪華さはないが、極めて素朴な佇まいを残している。郡山城唯一の建築遺構として市指定文化財となっている。寺宝としては柳沢吉保画像、同木造、定子夫人木造（法橋常慶作）等がある。

当寺は柳沢氏の菩提寺であり、明治以後の柳沢家の墓と霊拝堂があるが、柳沢吉保・吉里の墓はない。

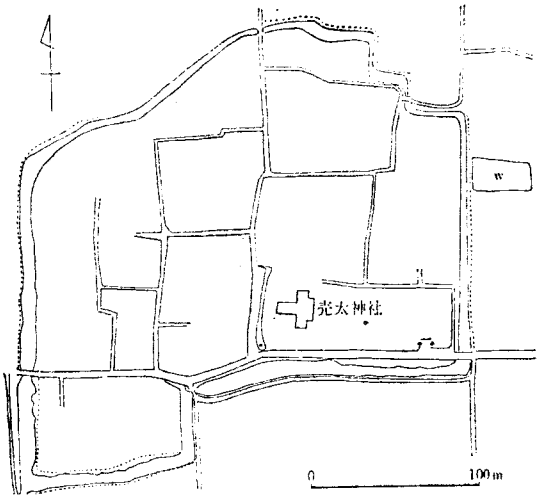
☆水野勝成と大和郡山（みずのかつなりとやまとこおりやま）

水野勝成とは、私達郷土福山の開祖「水野日向守勝成」その人である。勝成は元和元年(1615)４月に起こった、いわゆる大阪夏の陣で東軍大和口先鋒第一陣７千の将として指揮して奮戦したという。

戦後、家康は京都二条城にて大阪陣の論功行賞を行い、水野勝成は第３陣の松平下総守に次いで戦功第２と賞され、三州刈屋城主３万石から３万石加増されて大和郡山城主６万石を与えられ、元和５年(1619)８月備後に移封されるまで約５年間領した。

郡山城は増田氏(ましたし)が関が原の戦い後改易されて約１５年間、廃城とされていたために城址は荒廃し、田畑として耕される有様で、勝成は直ちに入城する事ができず城下

《郡山城全景空中写真（南上空から撮影）》



《稗田環濠集落要図》

洞泉寺に仮住まいしたという。

水野氏入部後、石垣や堀の修築は幕府直轄の事業として修築され、その他の本丸・二の丸・三の丸・角櫓・家中屋敷等は幕府よりの伏見城資材の払い下げ等により勝成の手により再建されたという。

★売太神社（めたじんじゃ）

稗田環濠集落の中央南部に鎮座。旧村社。祭神は稗田阿礼（ひえだのあれ）命・天宇受売命（あめのうずめのみこと）・猿田彦神。

社名の起源は次の話が伝わっている。

稗田の猿女の君は天皇から多くの養田を賜り、その田を猿女田、持主を猿女田主と呼んだ。のち猿の字を略して女田主、すなわち賣田主と呼ぶようになり、その祖神を祀り神社を賣太神社と称するようになった。

『延喜式』神名帳の添上郡「賣太神社」とされ、『延喜式』九条家本にはヒメタの訓注がある。近世には三社明神と称し、戦前までは「売田神社」と表記した。

稗田は天宇受売命の後裔、稗田阿礼の出身地で、古代神楽舞などに供奉した猿女君（さるめのきみ）氏の居住地と伝え、「大同類聚方」に添上郡売田主の家に伝わる薬として佐野辺薬を載せる。

ちなみに東方の山と郡山市美濃庄町に小字ヒルメダ、南方の同市横田町に小字サルベがある。

神社は環濠集落の南東部を占め、「径覚私要鈔」文安元年（1444）２月１０日条に「遣北面於古市陣ヒエタ」とあり、古市胤仙（ふるいちいんせん、興福寺宗徒・国人）が陣営とした稗田環濠の主郭部であったと推定されている。稗田荘は文明１１年（1479）、同１４年に筒井方によって焼かれている。

《売太神社拝殿》

★稗田環濠集落（ひえだかんごうしゅうらく）

環濠集落は、４周に濠をめぐらした集落で、大和盆地の各所にみられるが、稗田の集落は、その環濠が完存するほとんど唯一の例で、昭和５０年（1975）１０月２日、市の史跡に指定された。

《稗田環濠集落》

環濠は中世に、低湿地の水はけや用水にも利用されたが、本来は集落を外敵から守るのを第一の目的に作られたものとみられている。

稗田の環濠集落の濠の幅は４ｍ～１４ｍ前後、深さは２ｍ～３ｍである。近年その旧観が崩れつつあったが、本年修復工事が完了した。なお、環濠内集落は約８０戸である。

★奈良盆地の環濠集落（ならぼんちのかんごうしゅうらく）

奈良盆地には集落の周囲に濠めぐらす環濠集落が２００前後も存在していることが知られている。大和郡山市から橿原市や高田市にかけての地域で、特に田原本町から南の盆地に多く存在する。現在比較的よく環濠が残っているところは、大和郡山市稗田・若槻、天理市竹ノ内、田原本町保津・宮古、広陵町南郷、橿原市膳夫などである。

環濠集落は濠の内側にも土塁や竹藪をめぐらし、集落への入口も１～４ケ所程度しか設けず、集落の治安維持に努めたものと思われる。環濠集落が何時ごろどうして形成されたかについては、諸説があるが、鎌倉時代末期から農村では名主や作人が成長し、村落間の利害関係などの争いが激しくなるにともない、防御施設として濠をめぐらしたという説、さらには戦国時代の大和の土豪の争乱にまきこまれた村落が自衛のため、または軍事的な必要から環濠を設けたとする説、環濠は防御上とともに高地の灌漑用水としてもちい、河川の洪水を防ぐ目的でも掘削されたという生活的な面に重要な理由を求める説もある。現在においても、環濠に導水して灌漑用の用水路とする村がある。

☆稗田阿礼（ひえだのあれ）

天武天皇に仕えた舎人（とねり）で、猿女君（さるめのきみ）の一族。天鈿女命（あめのうずめのみこと）の子孫といわれ、大化４年（648）に生まれる。

記憶力が特に優れ、天武天皇３年（675）に、『帝皇日継』や『先代旧辞』を暗誦させられた。元明天皇の和銅４年（711）に、朝廷は阿礼の記憶していることを太安万侶（おおのやすまろ）に記述させ後世に残した。これが『古事記』３巻である。大和郡山市稗田町にある売太神社に祀られている。

★額安寺（がくあんじ）

大和郡山市額田部寺町にある。真言律宗、熊凝山（くまごりやま）の山号をもつ。聖徳太子が推古天皇のため大寺を建立しようとしててがけていたとされる熊凝寺（くまごりでら）の故地に、額田部氏出身の道慈律師が一寺院を建立し、額安寺と称したといわれている。道慈はその頃すでに新京の大安寺への移転を終り、この地に隠退して、入唐の際学んだ求聞持法の主尊虚空蔵菩薩像を安置し、宗法の興隆に努力していたと思われる。

額田寺伽藍並条里図に「額寺」または「額田寺揚原」ときされたところがあって、現在の額安寺の位置に合致するので、額安寺は天平宝字年間（757~765）ころすでに存在し、寺地に東西三町南北二町を占めていたものと考えられている。

《額安寺本堂（現在修復中）》

平安時代に入ると寺は漸次衰微し、一時は一部の仏像も興福寺に移されるほどであったが、鎌倉後期には西大寺の叡尊・忍性・慈信らが寺の再興に尽力し、寺勢が再び隆興することになった。

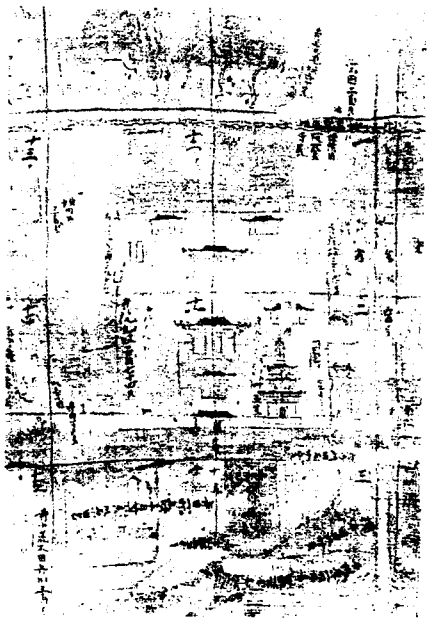
明応８年（1499）に細川政元の命を受けた沢蔵軒宗益が大和国に乱入した際に、この額安寺は他の多くの名刹とともに焼き払われた。織田信長の検地時に１８０石の寺領も没収されたが、豊臣秀吉の時には、残っている雁塔を天王寺にうつすことを条件に１町歩を与えられた。これによって江戸時代を通じて額安寺は朱印地１２石を許された。

土地の人は、この寺の名のおこりを次のように伝えている。聖徳太子の兄弟が額に腫

物ができて苦しんだとき、この寺に祈願して治癒したので、額の安らかな寺、すなわち額安寺とよぶようになったという。

☆額田寺伽藍並条里図
(ぬかたでらがらんならびにじょうりず)

額田寺（額安寺）の伽藍とその寺領を表すため作成されたもので、縦１１０ｃｍ、横９８．８横ｃｍの麻布に描かれている。建造物と寺領の境界は朱でかかれ、境界線には大和国印が押してある。また図の中には中臣毛人家・同畠・巨勢古万呂家・同地・船墓などの記入がある。奈良時代の伽藍配置を絵として残した例はほかになく、同時代の唯一の遺品としてきわめて貴重で、昭和３７年(1962)、国の重要文化財に、ついで昭和５２年(1977)、国宝に指定された。



《額安寺伽藍並条里図》

★額安寺虚空蔵菩薩半跏像
(がくあんじこくうぞうぼさつはんかぞう)

明治４３年(1910) ４月２０日重要文化財。像高５１．５ｃｍ、木心乾漆の半跏像である。同寺の開基道慈律師の本尊であって天平末期の手法を伝え、首飾・瓔珞(ようらく)などにも古法を窺うことができる。制作方法、荘厳具および所伝よりみて、天平彫刻の一形式と認めねばならない。しかし、相貌に生気がなく、肉付けが平板で、衣襞にも張りがないなどの点は鎌倉期の補修によるものとみられている。

奈良時代末期の作と思われる額田寺伽藍並条里図に金堂の右下に虚空蔵堂らしい堂が見えるが、おそらくこの堂に安置されていたのではないかと考えられる。

弘安５年(1282)、西大寺の興正菩薩が傷んでいる像を仏師善春・絵師明澄に修補彩色させた。このことは台座に墨書されている。

虚空蔵菩薩像としては、日本最古のものとして有名である。

《額安寺虚空蔵菩薩半跏像》

★額安寺文殊菩薩騎獅像
(がくあんじもんじゅぼさつきしぞう)

明治４２年(1909) ９月２１日重要文化財。木造、彩色、像高３１．８ｃｍ。

右手に剣、左手に経巻を持ち、獅子の背の蓮華座上に結跏趺坐(けっかふざ)する。一木造りで内堀りはほどこされていない。

体に比し頭部がやや大きすぎるきらいがある。細く切れ長の眼、細く筋のとうった鼻、小さな唇など、その面相は穏やかでよくと整っている。衣紋は襞数多く、かなり強く刻まれている。

獅子の顔は鼻が小さく、面相は穏やかで犬のようである。藤原時代初期の作と推定されている。

《額安寺文殊菩薩騎獅像》

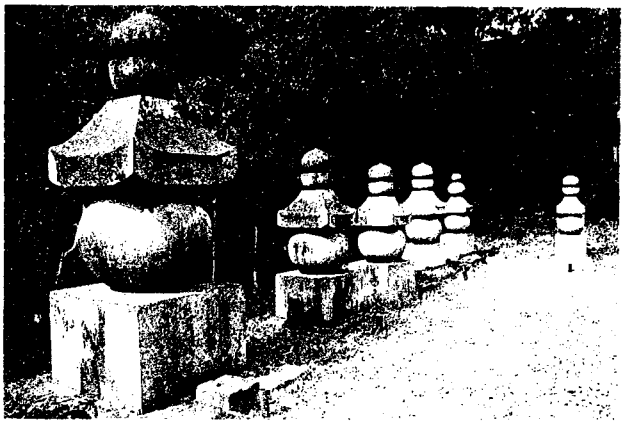
★額安寺五輪石塔群
(がくあんじごりんせきとうぐん)

昭和３４年(1959)３月２３日重要文化財。額安寺の北西にある石造五輪塔群で、このあたりでは「鎌倉墓」ともいわれている。指定を受けた８基の五輪塔は、敷地の西側に東面して５基、北側に３基が鍵の手に並んでいる。

東端および南から４番目のものに、永仁５年(1297)の銘があり、他のものも無銘ではあるが、このころ造立されたと思われる。

昭和５７年(1982)の解体修理の際行われた地下調査によって、南端の忍性墓のみが建立当初の位置を保っていることが判明している。

忍性墓の骨蔵器などは、中世の高僧の墓制を知る上で貴重な発見となった。



《額安寺五輪石塔群（鎌倉墓）》

★額安寺宝篋印塔
(がくあんじほうきょういんとう)

昭和５３(1978)年４月２０日指定文化財。額安寺境内明星池の中に建っている。文応元年(1260)の建立である。

総高２８３．３ｃｍ、基礎東面格狭間(こうざま)に「文応元年十月十五日願主永弘大工大蔵安清」の刻銘がある。

基礎上３段、塔身は輪郭を二重にとり、月輪内に金剛界四仏の種字を薬研彫りしている。

笠下３段、上６段笠隅飾りは軒口は連立せず、区別して直立、一弧無地。笠上は露盤、九輪宝珠とも欠損はない。各部の均衡が良く、壮重典雅な古塔で、鎌倉中期の様式の特色をよく表わしている。県下で２番目

《額安寺宝篋印塔》

の古さである。願主永弘はどのような人か不詳であるが、大工安清は大蔵派初期の石大工の１人と考えられている。

なお、寺の縁起では、慈真和尚が母のために造ったものと伝えている。

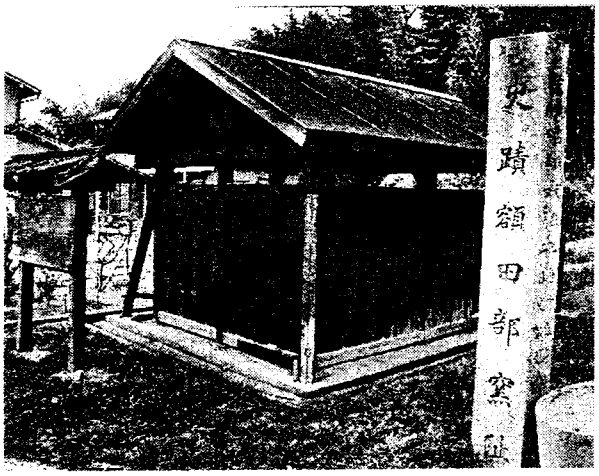
★額田部窯跡
（ぬかたべかまあと）

昭和４年(1929) ４月２日重要文化財、額田部北町字別所にある。昭和３年、用水池を掘る際、地下１尺のところで３個の瓦窯が発見された。窯の形式は平窯である。３個とも同形同大で、約１間おきに東西に並び、構造は矩形である。

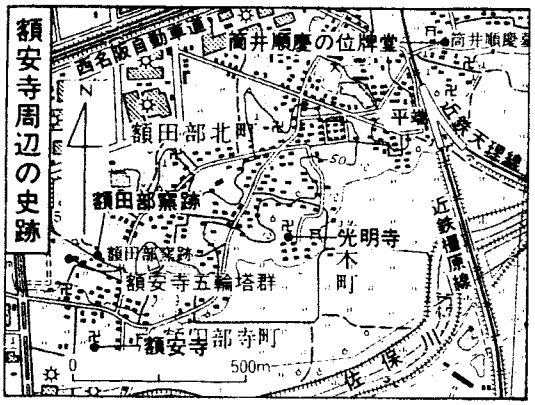
窯室の広さは内径で長さ４尺３寸、幅３尺３寸、深さ１尺２寸、壁の厚さ約４寸で、壁は凝灰岩ようの人造石からなっている。

煙道は深さ約３寸、幅４寸の三条の等間隔にならび、焚口や火床は、窯室とは別に作られた片口窯である。

窯内から発見された古瓦によって鎌倉時代の遺構と認められ、このうち最も保存のよい西端の窯は覆屋が設けられ、他２基は埋め戻された。



《額田部窯跡》



☆島の山古墳
（しまのやまこふん）

磯城郡川西町唐院にある巨大な前方後円墳である。

全長約１９０ｍ、前方部の幅９３ｍ、同高１１．０１ｍ、後円部は径９８ｍ、同高１７．４２ｍに達する奈良盆地の平坦部では最大級の巨大古墳である。墳丘の周囲には満々と水をたたえた周濠があり、その幅は約３５ｍ～４０ｍで、周濠を含めた長さは２６５ｍ、幅１７５ｍにもおよぶ。

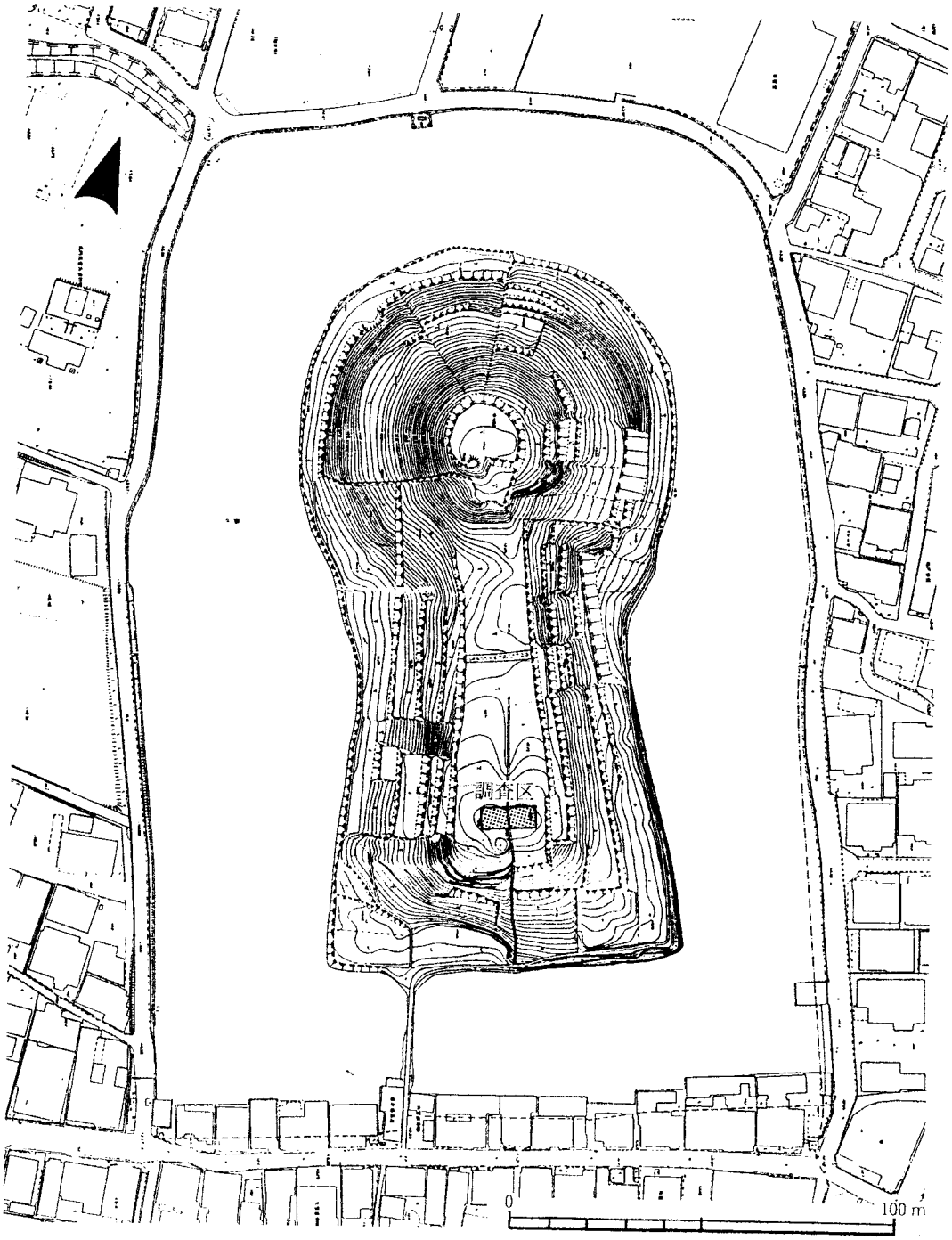
墳丘は果樹園や畠に開墾されて著しく変形されているが、３段築成であることがわかる。後円部は明治１５年(1882) ころ盗掘を受け、多数の遺物が取り出されという。その時の聞き書きから南北を主軸とする竪穴式石室があったと推測されている。

以前から墳丘形状などから５世紀前半の築造と推定されていた。また、墳丘には円筒埴輪や葺石が認められ、車輪石・鍬形石なども出土することが知られていた。

ところが、平成６年から８年にかけて橿原考古学研究所によって前方部が発掘調査され、粘土槨が検出された。この粘土槨は東西１０．５ｍ、南北３．４ｍ、深さ０．５ｍを測るが、開墾によりかなり削平されたと考えられ、墓壙の規模は現状よりも大きく深かったようである。棺はコウヤマキ製の割竹形木棺であり、蓋と身の一部が残存していた。

この発掘で特筆すべきことは、石製腕飾類が一挙に１３３点（車輪石８０点、鍬形石２１点、石釧３２点）も出土したことで、粘土槨に埋葬された人物の性格が注目の的となった。一説によれば、祭祀を司った女性を埋葬したものという。一方、後円部に埋葬

されていた人物は、西方の河合町にある奈良盆地部最大級の川合大塚古墳などとともに、大和川の水運を支配した古代豪族関わるものであろうか。



《島の山古墳調査区位置図》

☆比売久波神社（ひめくわじんじゃ）

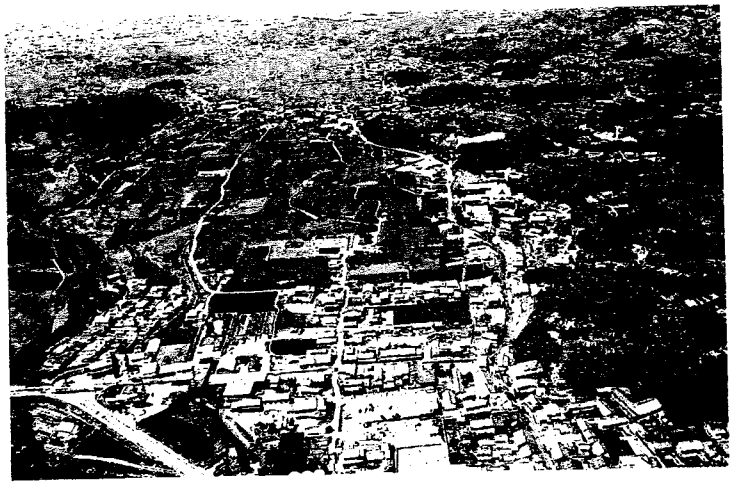
磯城郡川西町唐院に所在。『延喜式』神名帳の城下郡に「比売久波神社 鎮座」とある式内社。旧村社。大和川水系に合流する諸川に囲まれるように島の山古墳があり、当社はその西側に接して鎮座する。

祭神は『式内社調査報告』では、久波御魂神と天八千千姫とするが、「神社明細帳」では天八千千姫のみを記し、多くの書は祭神不詳としている。口碑では桑の葉を御神体にしたと伝えられる。７５０ｍ離れたほぼ真東の川西町結崎に糸井神社があり、機織り技術者集団の神が祀られたと考えられることから、古代にこの一帯は織物技術をもった集団が住みついていたと思われる。本殿は一間社春日造である。

《島の山古墳（左）と神社の森（右）》

★飛鳥（あすか）

奈良盆地東南部の地名。範囲は明確でないが、現在の奈良県高市郡明日香村のうち飛鳥川の流域にほぼ相当する。つまり飛鳥川の上流から飛鳥寺・雷丘（いかずつのおか）へかけての地域だが、これに耳成山（みみなしやま）・畝傍山（うねびやま）・天香具山（あめのかぐやま）の大和三山のある地域を含める説が一般的である。河内国にも飛鳥があり、都が大阪平野にあった５世紀には河内飛鳥を「近つ飛鳥」、大和の飛鳥を「遠つ飛鳥」と呼んだという説がある。



《空から見た飛鳥（南より）》

アスカを「飛鳥」と表記するのは「飛ぶ鳥の」の句がアスカの枕詞に用いられたことによる（『古事記伝』）が、「明日香」と表記する例も多い。他に「阿須箇」「阿須可」「安須可」の用字が『日本書紀』や『万葉集』にみられ、金石文では船首王後（ふねのおびとおうご）墓誌に「阿須迦宮」の用字がある。語源については以下の３説が代表的なものである。

①アスカは鳥の一種イスカのことで、これが群棲したことによる（賀茂真淵・伴信友）。
②アは接頭語で、スカ（洲処）は住所すなわち集落を表している。
③朝鮮半島からの渡来者が日本で安住することを得た地を安宿と称し、これを日本人がアスカと読みならわし、のちに朝鮮系の渡来人の安住地を一般にアスカと称し、大和のアスカもその一つである。

これらの説はいずれも確証がなく、推測にとどまる。ただし、『続日本紀』宝亀３年（772）条にみえる坂上苅田麻呂の奏言に「高市郡には朝鮮系渡来人が多く移り住み、他姓の者は１０のうち１、２である」とあり、飛鳥の地に渡来人が多くいたことは事実である。

この地にはしばしば皇居（多くの場合宮名に「飛鳥」が冠される）が置かれ、７世紀前後における政治・文化の中心地であった。いわゆる飛鳥時代である。古くは５世紀に

允恭天皇が遠飛鳥宮、顕宗天皇が近飛鳥八釣宮（ちかつあすかやつりのみや）を置いたと伝えられる。その後５９２年の推古天皇の飛鳥豊浦宮（あすかとゆらのみや）から和銅３年（710）の元明天皇による平城遷都まで１１０余年間は、孝徳・天智・弘文の３代約１５年間を除き、都は終始飛鳥にあった。

この地で氏姓制度から律令制への転換が行われ、古代国家の体制が形成された。また、仏教文化を中心とする飛鳥文化が興隆し、飛鳥寺・川原寺（かわらでら）・山田寺・橘寺・大官大寺など多くの寺院が建立された。現在はそれらの宮や寺のほとんどが荒廃しているが、わずかに残る遺跡は各所に散財する古墳とともに古代の繁栄の跡を物語っている。『万葉集』に歌われた地名も多く、古代の歴史・文化・文学の愛好者の遺跡めぐりがたえない。

★新沢千塚古墳群（にいざわせんづかこふんぐん）

貝吹山（標高２１０．３ｍ）北・麓の約６００基におよぶ古墳時代中後期の大群集墳。

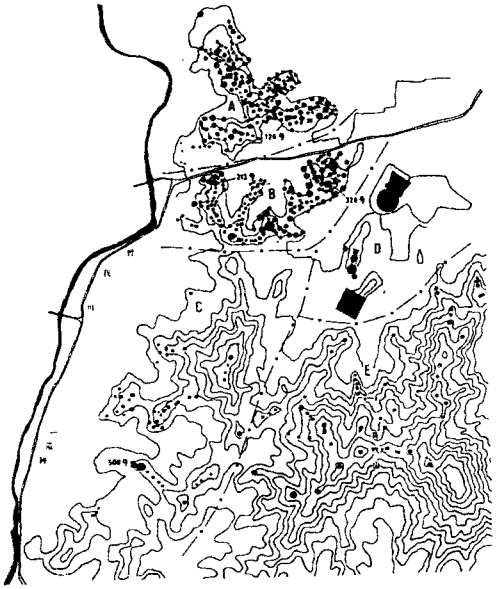
旧新沢村内にあるので一般に「新沢千塚」と呼称するが、現在は所在地が橿原市川西町にあたるので「川西千塚」と呼ばれることもある。

ほとんどの古墳は直径１０ｍ～３０ｍの円墳だが、前方後円墳・方墳・長方形墳も存在する。昭和３７年から４１年にかけて（1962~1966）１２５基が発掘調査された。調査された大多数の古墳は土壙の中に木棺を直葬したものだが、横穴式石室墳３基を含んでいる。棺内には須恵器・刀剣・鉄鏃（てつぞく、鉄製のやじり）・刀子（とうす、ナイフ）等を副葬し、なかには鏡・甲冑（かっちゅう）・馬具・工具などをもつものもあって、そのほとんどは５世紀から６世紀にかけての築造と考えられている。

古墳群中では、南端に位置する第５００号古墳（新沢茶臼山古墳）が最も早く築造された。この古墳は全長６２ｍ、後円部径３２ｍ、前方部幅２４ｍの前方後円墳である。木棺を被覆した粘土槨内からは鏡・玉類・石釧（いしくしろ、石製の腕輪）・筒形銅器・銅鏃（どうぞく、銅製のやじり）・刀剣・短甲などの多量の副葬品が出土し、４世紀後半の築造と考えられている。

最も異色な古墳として注目されるのは第１２６号古墳で、金銀製品・ガラス製品をはじめとす多量の遺物を出土して学会を驚嘆させた。龍文唐草を透かし彫りした方形金冠、金製垂飾付耳飾り、金製の瓔珞（ようらく、珠玉をつないで作った髪飾り）や指環・腕環・帯金具やガラス皿・カットガラス、ほか漆盤・銅製火熨斗（ひ

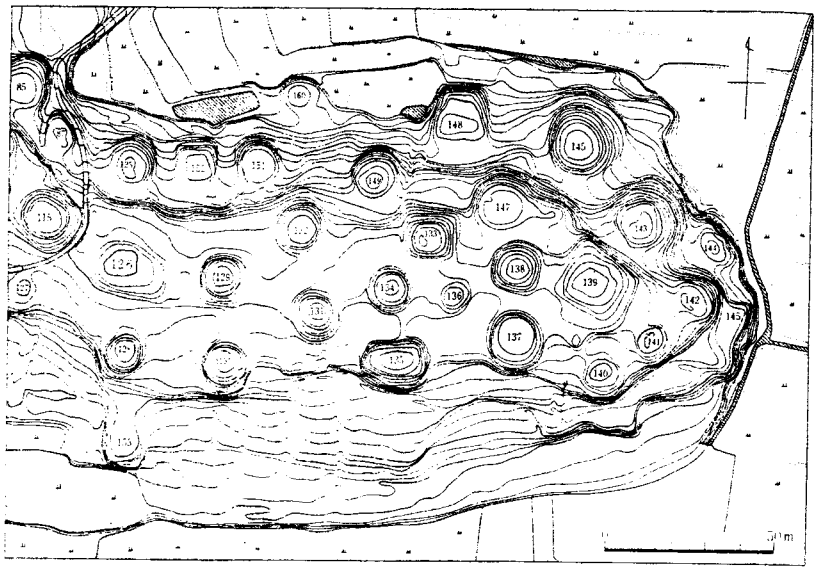
《新沢千塚古墳群遠景》



《新沢千塚古墳群分布図》

のし、アイロン）など珍奇で貴重なものばかりで、朝鮮半島との関連を考えなければならない問題を提示した。

新沢千塚古墳群はその一部が調査されているだけだが、奈良県下でも最大級の群集墳である。しかも他の地域よりもほぼ1世紀ほど早く築造が開始され、また、きわめて大陸的な色彩の濃い遺物を出土するなど、注目すべき古墳群であり、蘇我氏あるいは大伴氏、さらには東漢氏（やまとのあやうじ）の墳墓に比定する説がある。古墳群の一部は昭和５４年（1979）国史跡に指定され、史跡公園として整備されている。



《新沢千塚１２６号古墳周辺の測量図》

★越岩屋山古墳（こしいわややまこふん）

越集落の北、近鉄飛鳥駅のすぐ西方にある。墳丘は周辺から削り取られ、ことに西半分の損壊が著しい。

昭和４８年（1973）、明日香村教育委員会によって測量調査が実施され、１辺約５４m、三段築成の方墳で、石舞台古墳（明日香村島庄）や赤阪天王山古墳（桜井市倉橋）などと同程度の規模であることが判明した。

昭和５４年（1979）には明日香村教委と橿原考古学研究所が石室を調査した。切石造で精美な横穴式石室がほぼ南面して開口している。

《越岩屋山古墳墳丘部》

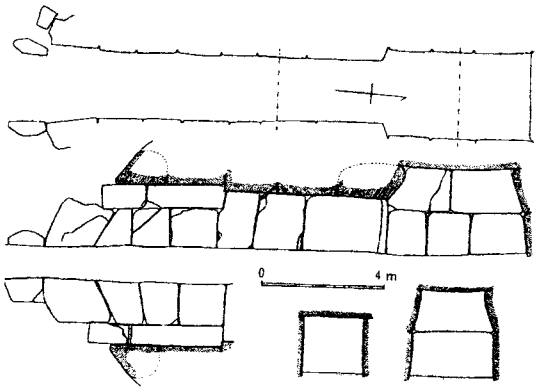
玄室長約４．７m、幅２．７m、高さ２．６m。巨大な花崗岩の切石を２段に積み、天井は１枚の巨岩で覆う。

羨道部は長さ１２m、幅・高さ約１．９m。奥半部は１段、前半部は切石を２段積みで

やや高くされている。

羨道入口から天井石、眉石の下端に細い切り込みがあり、閉塞のための扉石の存在が考えられ、また、この石の上面が斜めに平滑に加工されており、羨道の前端が封土の外に露出していた可能性を示している。

このような切石造の横穴式石室は「岩屋山形式」と呼ばれ、飛鳥地方（小谷古墳等）から桜井市（艸墓古墳）・天理市（峯塚古墳）にかけて類似のものがあり、平群町（西宮古墳）・大阪府太子町（叡福寺北古墳［聖徳太子墓］）などにもみられる。被葬者については、吉備姫王（檜隈墓）、巨勢小柄宿禰（こせのこがらのすくね）の墓とする伝承があり、斉明天皇陵とする説もある。いずれも決定する史料はなく、不明とするほかないが、７世紀前半中頃の築造と推定され、飛鳥時代の天皇家を含む有力豪族の墓であることは確実である。



《越岩屋山古墳石室実測図》

★中尾山古墳（なかおやまこふん）

高松塚古墳の北に位置するが、早くに盗掘を受けて石槨が露出していた。この石槨の内法（うちのり）は約９０ｃｍ³程度であり、外形は古墳の形態を示しているものの埋葬とは考えられず、火葬骨を納めた特殊な構造として国の史跡に指定されている。この古墳はすでに江戸時代から知られ、「中尾石墓」とも称された。また、文武天皇陵に比定されたこともあり（『大和志』）また、８角形墳ではないかと推定する説があった。

昭和４９年（1974）、明日香村教育委員会・橿原考古学研究所により調査された。この調査では、石槨周辺の整備と外部施設の有無を確認するため墳丘外の北および東側が発掘された。その結果墳丘をめぐって二重の８角形の外部施設があり、また、八角三成であったことが判明した。

《中尾山古墳の墳丘部》

石槨は底石に高さ約１．７ｍにおよぶ花崗岩の巨石をすえ、その上に凝灰岩の切石を用いて側石を造っている。さらに花崗岩の巨石を天井石とする構築方法で、南側石を閉塞石とする横口式石槨の構造であり、しかも四隅には柱石を置く特殊な手法を用いていた。石槨にいたる南側墓道があり、その下層には礫（れき、小石）を詰めた廃水溝が設けられていた。また墳丘や墓道には版築の手法を用いていることも判明した。なお、以前に１個あることが知られていた沓方の石材が他にも１個あることがわかった。しかし、これらはどのような場所にどのような目的で使用されていたか明らかではない。

盗掘の際の排水溝中に瓦器小片を検出しただけで他には遺物は発見されなかった。最近の研究では、中尾山古墳が真の檜隈安古岡上陵（ひのくまのあこのおかのへのみささぎ、文武天皇陵）で

あるとの説が有力視されている。

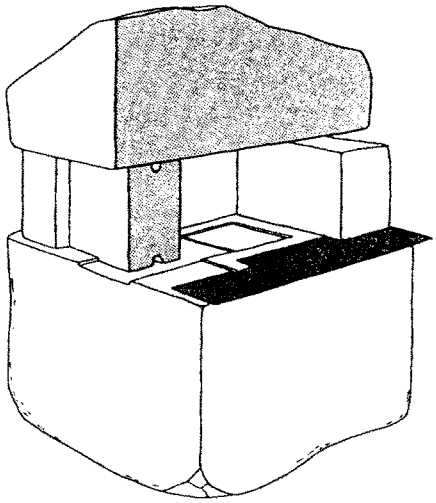
★高松塚古墳
(たかまつづかこふん)

平田集落の西南部、現文武天皇陵である檜隈安古岡上陵(ひのくまのあこのおかのへのみささぎ)から北に延びた丘陵にある古墳で、江戸時代には文武天皇陵に比定されたこともある。昭和４７年(1973)３月、橿原考古学研究所・明日香村教育委員会により調査され、壁画の発見で同年１０月には文化庁も調査を実施した。

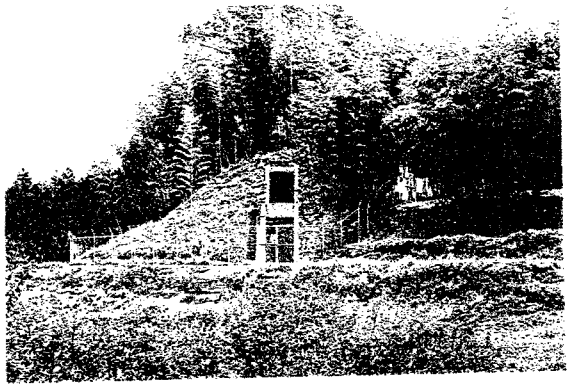
古墳は直径約１６m、高さ約５mの円墳であり、墳丘は版築をもって築成されている。墳丘の南側に墓道があり、その作業面に敷き板の痕跡が４条あった。墓道の正面には凝灰岩の切石を組み合わせた横口式石槨があり、その南側石の外より向かって右上に盗掘坑があった。石槨内法の計測値は長さ２．６５m、幅１．０３m、高さ１．１４mで、漆塗木棺が置かれ、棺は長さ２．０２m、幅約０．６mで金箔を漆箔(しっぱく)にしてある。

また、側壁面には漆箔を施し、極彩色の壁画が描かれている。壁画は星宿・日月・四神・人物群像で、天井の中央には紫微垣と２８宿を表す星宿が描かれ、東西両壁中央部には、東壁に金箔で日像、西壁には銀箔で月像を表し、さらに盗掘のために消失した南壁面を除いておのおの壁面の中央に、東壁には青龍、西壁には白虎、北壁には玄武のいわゆる四神獣を描いている。さらに東壁面南側には男子の４人の人物群像、北壁には女子４人、相対する西壁面にも南側に男子４人、北側にも女子４人をそれぞれ群像形式で描かれている。

このような本格的な壁画のある古墳は、日本では初めての発見であり、これをめぐって種々の見解が述べられた。しかし、これらの壁画の根本にあるものは中国における伝統的な思想を背景とするものである。また、盗掘を受けていたものの、金銅装棺金具や、海獣葡萄鏡１面、銀装大刀外装具などが残存していた。壁画や副葬品は他の古墳と大きく異なり、むしろ正倉院宝物を始め、社寺に伝世されてきたものに近く、高松塚古墳の文化史的



《中尾山古墳の埋葬主体部模式図》



《高松塚古墳墳丘の現状》

《高松塚古墳壁画》

意義を高めるものとなった。古墳は国特別史跡、壁画は国宝、出土遺物は重要文化財に指定されている。

★猿石（さるいし）

《猿石［山王権現］》

元禄１５年(1702)秋、のちに欽明陵に治定された平田梅山古墳の南、字池田の田圃から４体の猿石が掘り出され、梅山塚の前方部南側に並べられた。その後、おそらく明治初年頃、斉明天皇の母である吉備姫王の墓前に移された。

猿石は池田から掘り出された石造の総称で、その造形からそれぞれ「法師」「男性」「女性」「山王権現（猿石）」と呼びならわしている。また、高取の猿石、光永寺の顔石は同様のモチーフで技法的にみても、同一場所から出土したとみられている。

①「山王権現」は西に面して南北に並ぶ４体の北から２番目の像で、頭でっかちの姿で正座蹲踞(そんきょ)する裸像の２面石である。頭部と下腹部とが黒色砂岩の捕獲部分になる。真上から見ると、菱形の原石の稜角部を顔の正中線に付けている。高さ１２８ｃｍ、最大幅１０１ｃｍ、最大厚さ８４ｃｍである。頭部は額の生え際をふちとせりし、オールバックの髪型とするが、額中央から石質が変わるため、あたかも黒っぽい頭巾を被っているように見える。杏仁様の大きな目、大きな鼻はあぐらをかき、大きな口を閉じている。胸部はふくらみ、両手を腹に置く。下腹部には陰茎を作り出しており明らかに男性である。この像だけは両足を正座しているが、左足裏の細部まで緻密に表現している。

背面の姿はやや下位に彫っているため表面の像とは段違いになっている。奇怪な獣像は、やや右に傾けた四角な顔面に正円のくぼんだ目と大きな鼻、横一文字に結んだ口には牙がある。顔面が黒色砂岩の位置となり、黒い面を被ったように見える。額のしわの両側には大きな耳があって、そのうしろに角とたてがみ状の耳髪がある。おそらく背面の像は人間ではないだろう。

②「男」は南端にある像で、尻を地につけて座る男性裸像である。高さ９９ｃｍ、最大幅９０ｃｍ、最大厚さ５８ｃｍである。顔の表情は笑う埴輪を連想させる。しゃくり顎の口元には髭をたくわえ、小さな目と口元は好々爺のようなユーモラスな表情をしている。頭部は烏帽子のようにやや高く造っているが、後頭部に６条の沈線の毛髪を束ねているので烏帽子でなく、額の生え際を表している。猪首のため怒り肩となり、筋肉を示す沈線がある。手の下に下腹のふくらみを示した円弧状の突出部がある。「山王権現」像同様に肥満体か、腹のたるみであろう。

背面は全体の約半分が顔で、腹ばいにしゃがんだ邪鬼のような姿をする。下ぶくれの顔が張り、上唇が厚い。大きな鼻と上まぶたの張った小さな目をもつ。毛髪はオールバックにかきあげ耳を出す。背面は左手を顎の下、右腕でひじをつく。右耳の後ろで人差し指を丸めている。おそらく女性であろう。

③「女」は北端の像である。腰をかがめ、尻をつける。高さは１００ｃｍ、幅６５ｃ

いる。
この二つはもとは花崗岩の巨石を精巧に加工した石棺式石室の床石と、天井・壁を構成する蓋石（ふたいし）とであった。このほかに扉石を加え、３石を組み合わせた構造であったが、現在は扉石がない。

床石（鬼の俎）中央の墓室部分は一段高く、全体に甲盛りがある。南正面には扉石の痕跡を残し、中央に扉を固定するほぞ穴を造っている。蓋石（鬼の雪隠）はドーム状に石をくり抜き、入口両端に扉石をはめ込む仕口を造る。両側面と奥壁の上半分は内側に傾斜する。元の墓室の内側寸法は長さ２．７９ｍ、幅１．５４ｍ、高さ１．３ｍに復元できる。蓋石の外側は野面を荒削りしたままであるが、入口周囲の幅２．７ｍは石の表面を丁寧に加工し、両側に稜線を造っている。鬼の俎から約３５ｍ南の墓室中軸線上の水田崖面で断面Ｕ字形をした羨道の痕跡を残している。

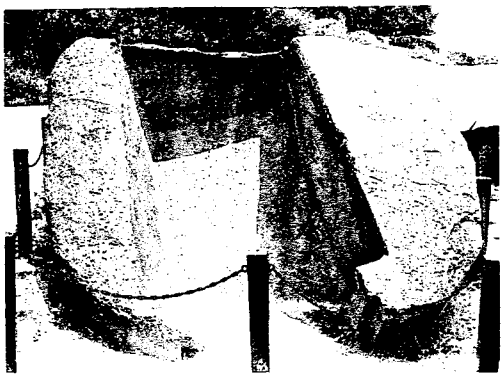
盛土がなくなっているため墳丘の形式は不明である。このような形式の墓室は、７世紀初め河内飛鳥（大阪府太子町周辺）で、家形石棺をそのまま古墳の墓室に利用したのが始まりである。やがて羨道・玄室を省略する傾向が強くなる。この背景には朝鮮半島百済王家の小石室の影響もあったと考えられている。７世紀中頃、こうした家形石棺を源流とする墓室が飛鳥でも築造され始めるが、鬼の雪隠・俎は盛土で埋めるため家形石棺の外観の加工が省略され、入口周縁だけが整形されている。現在のところ石棺式石室としては飛鳥で最も古い形式とされている。

★亀石（かめいし）

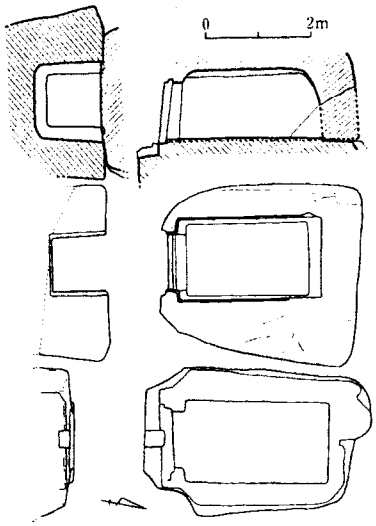
明日香村川原と野口の境にある亀石は橘寺仏頭山より派生する丘陵端近く「カメイシ」にある。

文献上の初見は、平安時代の永久４年(1116)、弘福寺（川原寺）の僧、彦印による寺領の申請文書（東寺文書）である。これによると、川原寺の領畠に「高市郡東三十条三里六坪二反六十歩並畠字亀石垣内」とあり、亀石は大和条里、東三十条四里の東南隅の六の坪にあることがわ

《鬼の俎》



《鬼の雪隠》



《鬼の俎・雪隠実測図》

かる。平安時代にはすでに現在の場所にあったようだ。

亀石は長辺4．53m、短辺2．77m、高さ2mを越える花崗岩製の野石下面にあたる平端面に溝彫りをほどこしている。そろばん玉の形をした野石の稜角部を背中にしている。石の加工は顔面の目と口の周囲を象徴的に細工するのに止め、弧状に突出した瞼は深く彫り込まれている。体躯や四肢は特別に彫られていないが、基底部には益田の岩船の基底部のそれに類似する格子状の刻みがある。

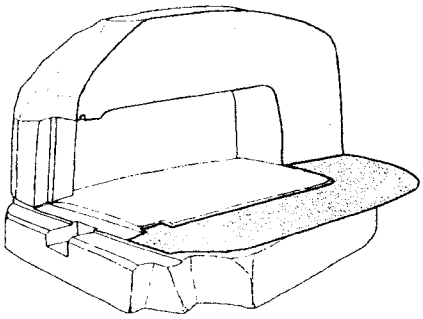
この石は一見、未完成のように見えるが、裾の輪郭を線彫りしていること、目の下より口元にかけてを未調整のまま残していることをみれば、採石と石の割付に充分気を配った完成品と判断できる。顔面中央と尾部を結ぶ中軸線は約39度南西に向けている。　なお、西南の方を向いている亀石が、西面するとき世界が泥の海に浸かってしまうという伝説がある。

★橘寺（たちばなでら）

橘集落の西端にあり、県道を隔てて川原寺跡に対する天台宗の寺院。正式には仏頭山上宮皇院菩提寺（ぶっとうさんじょうくうおういんぼだいじ）といい、通称は橘樹（たちばな）寺または橘寺。本尊は聖徳太子座像（国重文、室町時代）である。

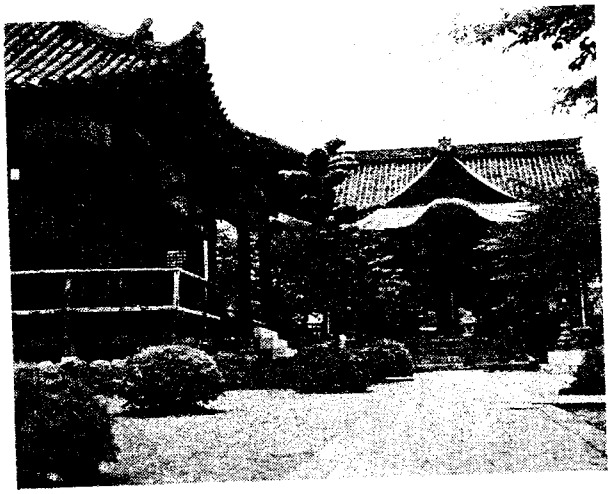
創建について明らかでないが、「法隆寺伽藍縁起并流記資材帳」や「上宮法王帝説」は法隆学問寺・四天王寺・中宮尼寺・蜂岡寺（広隆寺）・池尻尼寺（法起寺）・葛城尼寺とともに聖徳太子建立の7寺の一つとして橘尼寺をあげている。

天智天皇5年（666）の作とされる野中寺（やちゅうじ、羽曳野市）弥勒像銘に「橘（栢？）寺智識」とあるのをこの寺のこととすれば、当時の橘寺の存在が確かになるが、疑問視する声もある。文献上の初見は『日本書紀』天武天皇9年（680）4月条の「橘の尼房に失火して、十坊を焚（や）く」とあるもの。昭和28年（1953）以来数次の発掘調査が行われた結果、塔と金堂・講堂・中門・回廊および北門の遺構が検出され、中門・塔・金堂・講堂が一直線に並ぶ四天王寺式伽藍配置で、東に向かい、中ツ道に面していたことが明らかになった。



《鬼の俎・雪隠組み合わせ模式図》

《亀石》

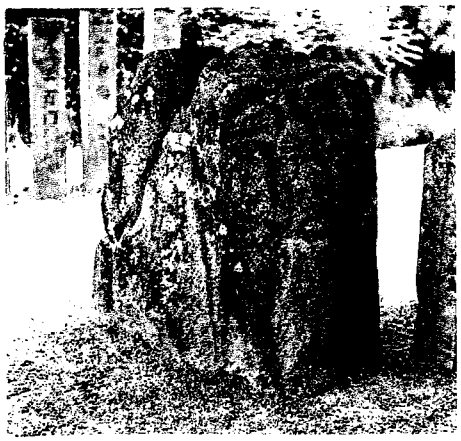


《橘寺境内、正面本堂》

塔の心礎は１辺約１．５ｍの方形造り出しの中央に直径・深さとも９ｃｍの円形を彫り込み、三方に添え木を受けるためと思われる半円形の孔を彫り加えたものである。類例として西琳寺（現羽曳野市）心礎・野中寺心礎・法隆寺若草伽藍心礎があるが、珍しい形式である。

寺地からは以上のほか博仏片（白鳳時代）や古瓦（飛鳥～鎌倉時代）が多数出土している。寺宝としては、絹本著色太子絵伝（重文、室町時代）・木造日羅立像（重文、貞観時代）・木造如意輪観音座像（重文、藤原時代）・木造地蔵菩薩立像（重文、藤原時代）・木造鼉太鼓縁（重文、鎌倉時代）・石灯籠（重文、室町時代）等がある。

境内には飛鳥の謎の石造物の一つで「二面石」と呼ばれる奇怪な石像がある。寺伝では、善悪二つの顔を彫ったものという。なお、境内全体が国史跡に指定されている。



《橘寺の二面石》

★川原寺跡（かわらでらあと）

川原寺は川原（かわはら）集落の東、飛鳥川左岸にあった古代寺院で、飛鳥時代には大官大寺・飛鳥寺とともに飛鳥三大寺の一つであった。現在、仏陀山東南院弘福寺（ぶっださんとうなんいんぐふくじ）と称する真言宗豊山派の寺が残り、法灯を継いでいる。

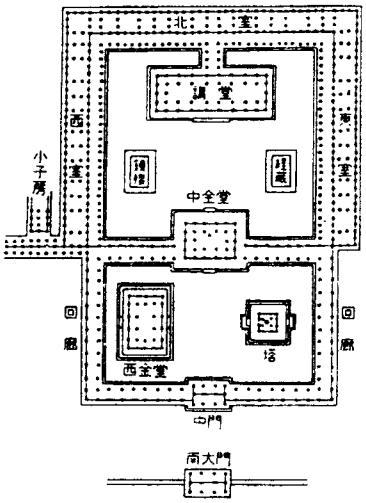
本尊は十一面観音。『延喜式』玄蕃寮（げんばのりょう、寺院僧尼に関することや外国使節の接待を司った役所）によると、平安期には、弘福寺として１５大寺の一つに数えられている。

寺宝の木造持国天・多聞天立像は藤原時代の作で国重要文化財。他に十二神将軍像（藤原時代）を安置する。

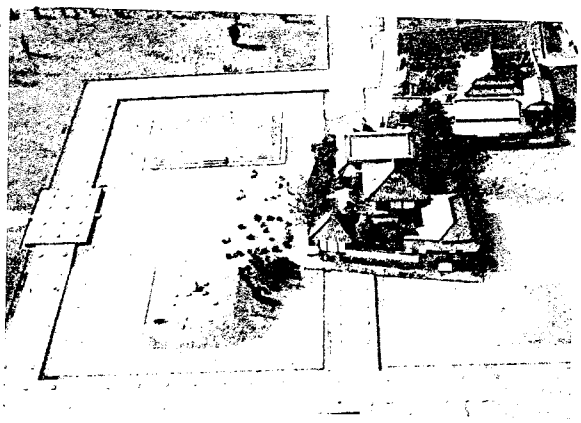
文献上の川原寺初見は『日本書紀』孝徳天皇の白雉４年（653）６月の条で、故僧旻（みん）のために「画工（えかき）狛堅部子麻呂（こまのたてべこまろ）・鯽魚戸直（ふねとのあたひ）等に命（みことおほ）せて、多（さは）に仏菩薩の像を造る。川原寺に安置す」とある。また、天武天皇２年（673）３月、この寺で日本最初の一切経写経が行われている。

創建については敏達天皇１３年に蘇我馬子が建立したとする説（『諸寺縁起集』）、斉明天皇元年１０月、飛鳥川原宮を寺とした説（『元亨釈書』『扶桑略記』）、天武朝とする説（「弘法大師遺告」）などがある。

『紀』によると、天武天皇１４年（685）８月１３日に行幸があり、その後も天武帝に関連する記事が多いことから同天皇の崇敬が厚かったと推定できる。



《川原寺伽藍配置図》



《空から見た川原寺跡》

一方、弘福寺の初見は『続日本紀』文武天皇の大宝３年(703)１月５日条で、大安寺・薬師寺・元興寺（奈良市）・弘福寺の４寺において太上天皇のために斎会(さいえ)を営んだ、とある。また、和銅２年(709)７月２５日の「弘福寺田畠流記帳（円満寺文書）」に「弘福寺 川原」とみえ、高市郡寺辺に田３町３段３９歩・陸田１１町９段１０２歩があったことを記し、弘福寺を川原寺とも称したことがわかる。以後どちらの名称も使用されている。なお『日本紀略』には、大同２年(807)１１月２日、伊予親王・藤原吉子を謀反の嫌疑により川原寺の一室に幽閉したが、２人は服毒自殺したのと記載がある。

現在、弘福寺本堂の南には多くの礎石が残っており、南大門・中門・塔・中金堂・講堂・僧坊跡等が検出された。現本堂は川原寺中金堂跡にあり、「瑪瑙(めのう)石」といわれる礎石が存在する。一帯は復元整備が行われ、国史跡に指定されている。

★飛鳥川（あすかがわ）

奈良県飛鳥の里を貫流する名川で、全長は約３２ｋｍである。古来、歌詠で知られ、「世の中は　何か常なる　あすか川　昨日の淵ぞ　今日は瀬になる」（『古今和歌集』）はとくに有名。

飛鳥の奥に発する畑川と多武峯(とうのみね)に発する細川とが岡（明日香村の大字）で合流して飛鳥川となる。大和三山の間を北西に流れ、橿原市八木・今井との境界線を北上して、河合（北葛城郡河合町）付近で大和川に合流する。

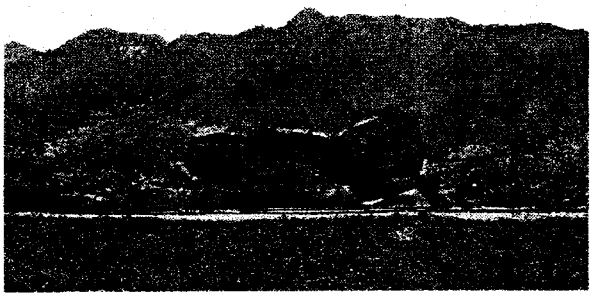
豊浦(とゆら)・雷(いかずち)などの飛鳥の平坦部を走るあたりが、飛鳥川の主体部をなし、その清流が飛鳥人に愛され、歌に詠まれた。いま川幅は１０ｍ前後で、水量も豊かではないが、往時は水源地帯の樹叢も密で谷間も深く、したがって水量も豊富であったと思われる。灌漑(かんがい)のために堤防が設けられるようになり緩流となったらしい。

《雪の飛鳥川》

★石舞台古墳（いしぶたいこふん）

明日香村島の庄の丘陵端部に立地する方形墳で、墳丘上部の封土は完全に失われ、横穴式石室の外観を知ることができる。墳丘下半部は西南辺が約５０ｍ、東南辺が約５１ｍを測り、２ｍ～３ｍほどの高さを示す。墳丘上半部については方形あるいは円形と考えられ、２段築成の方墳か上円下方墳と思われる。

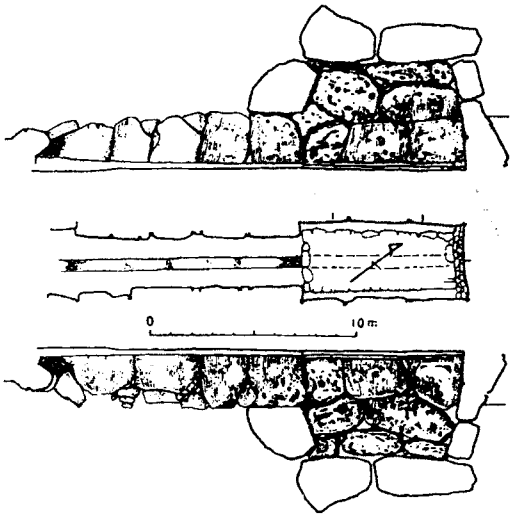
墳丘をめぐる堀は西南側で約８ｍと広いが、他では約７ｍほどの幅をもつ。また、墳丘および外堤斜面には花崗岩玉石を貼り付けている。外堤幅は基底



《石舞台古墳》

部で約１０ｍほどである。

南西に開口する横穴式石室は花崗岩を用いた両袖型を示し、全長約１９．１ｍ、玄室長７．５ｍ、幅約３．４５ｍ、高さ４．７ｍ、羨道部長さ１１．５ｍ、幅２．５ｍ、高さ２．４ｍを測る。側壁面は平滑になっており、壁面調整を施している。奥壁は１石２段積み、側壁は３段積みで、羨道側壁は１段積みを基本としている。玄室天井は２石で構成されている。玄室奥・側壁に沿って排水溝をめぐらし、奥壁中央で玄室床面下を貫通して羨道部排水溝につながっている。



《石舞台古墳石室実測図》

玄室内からは凝灰岩の破片が出土し、石棺の存在を示唆している。古くから開口しているため副葬品は不明であるが、墳丘内外より須恵器片・土師器片・金銅製尾錠・金銅製菊座金具・金銅製帯金具等が出土している。

石舞台古墳は石室の形式や出土品から７世紀前半と築造と考えられている。古くから蘇我馬子の墓という伝承があるが、これを妥当とする学説が多い。

★岡寺［龍蓋寺］（おかでら［りゅうがいじ］）

地名から岡寺と通称されるが、正式には東光山龍蓋寺真珠院（とうこうざんりゅうがいじしんじゅいん）である。真言宗豊山（ぶざん）派に属し、本尊は如意輪観音。西国観音霊場７番札所でもある。

寺伝によれば、開創は７世紀末、開基は義淵。また、天智天皇の御代に観音に祈願して子（義淵）を得た老夫婦の手から天皇がその子を召して草壁御子とともに養育し、御子の薨去後、その宮（岡宮）を義淵に賜って寺としたことに始まるという。さらに龍蓋寺と称するのは、義淵が寺の境内の池に龍神を勧請し、石で龍穴を覆ったからだという。

《岡寺（龍蓋寺）山門》

義淵はまた、別に龍門・龍福・龍泉・龍象寺を開いたと伝えられ、玄昉（げんぼう）・行基・良弁・道慈・道鏡らはいずれも義淵の弟子と伝えられる。

寛永９年（1632）の書上控（「春日神社文書」）によれば、興福寺末寺で、朱印領２０石を有していたという。寺宝に乾漆義淵僧正座像（国宝）のほか、日本最大の塑像で奈良時代作の本尊如意輪観音像、同じく奈良時代作の銅像如意輪観音半跏像、木造仏涅槃像、天人浮刻博（以上いずれも重文）がある。

☆義淵（ぎえん）

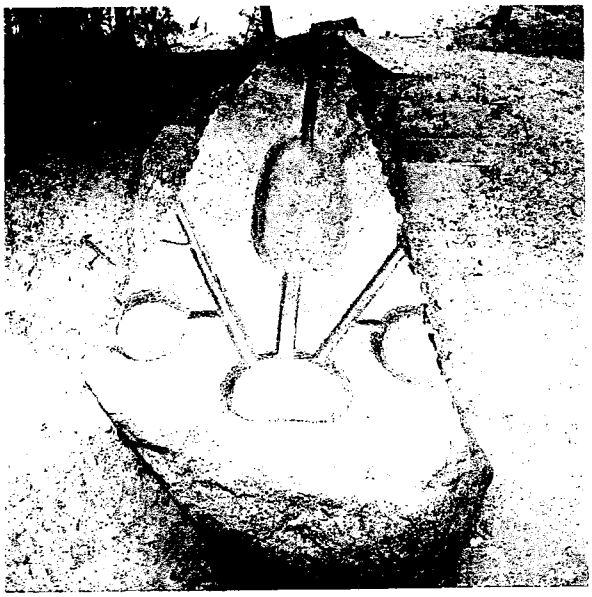
「ぎいん」ともいう。奈良時代の法相宗の僧。元興寺智鳳（ちほう）の弟子。俗姓は市往氏（い

ちきうじ）とされるが、阿刀氏（あとうじ）とする説もある。龍蓋寺（岡寺）以下、龍のつく寺を５寺建立した。文武天皇３年（699）、学業褒賞で稲一万束を賜り、大宝３年（703）には僧正に昇り、元正・聖武両朝の内裏に供奉した。聖武天皇の勅に、先帝の時代から現在まで内裏に出仕し、一つとして誤りとなかったと絶賛されている。神亀４年（727）一族に岡連（おかのむらじ）の姓を賜る。神亀５年（728）１０月２０日龍蓋寺で没すると、勅使が遣わされ、多数の布類が贈られるなど、天皇の崇敬と厚遇を受けた。

★酒船石（さかふねいし）

明日香村村岡。飛鳥寺から南へ丘陵沿いに道を南に進むと、袋状の小盆地に張り出した丘があり、その丘の竹林中にある。名称について、明和９年（1772）の本居宣長『菅笠日記』によると、里人が長老の酒船石と言い伝えていたという。

東西方向を長軸としている。現状では東西長軸５．５ｍ、南北２．３ｍ、厚さ約１ｍの扁平な長方形をしており、上面は岩肌を利用した平端面に楕円形と円形のくぼみを直線溝で樹形図のように結んでいる。主軸に沿って１０ｃｍ、深さ３ｃｍの断面Ｕ字形の溝を通し、石の東端に起点には南北両側面には近世の石割工具である「矢」の痕跡を残している。『西国三十三名所図会』に描かれて酒船石の絵には、すでに矢の痕跡が見られ、１８世紀にすでに南山との各所で高取城の石垣用材として石の採取が進んでいたことがうかがえる。

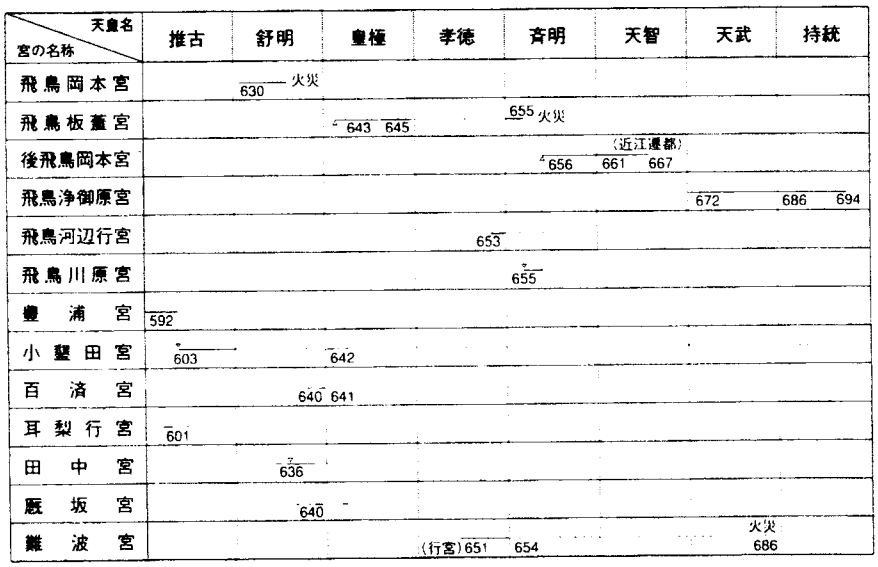


《酒船石》

★飛鳥京（あすかきょう）

奈良盆地東南部の飛鳥の地には、６世紀末から７世紀末までおよそ１００年間、数代の天皇の皇居が置かれ、政治・文化の中心地となった。

つまり推古天皇の豊浦宮（とゆらのみや）・小墾田宮（おはりだのみや）、舒明天皇の飛鳥岡本宮・田中宮・厩坂宮（うまやさかのみや）、



飛鳥を中心にした大和に難波宮をつけ加えた。

《飛鳥諸京の変遷表》

皇極天皇の飛鳥板蓋宮(あすかいたぶきのみや)、斉明天皇の飛鳥川原宮(あすかかわらのみや)・後飛鳥岡本宮(のちのあすかおかもとのみや)、天武天皇の飛鳥浄御原宮(あすかきよみはらのみや)である。

これらの宮の位置・遺跡はまだ正確には判明していないが、多くは明日香村岡から橿原市田中町へかけての飛鳥川に沿う狭小な地域にあったと推定されている。ふつうこの諸宮のあった地域を一括して飛鳥京と呼ぶが、『日本書紀』などによると、当時は単に京または京師と称した。

難波京や近江京に対して倭京(わきょう)ということはあっても、飛鳥京という名称は用いられなかったようである。すなわち、いわゆる律令制下における都城の京とは異なり、大王と諸臣との人格的隷属関係を基礎とし、大王宮の周辺に宮・宅・市・寺などが散在する景観を示していたと考えられる。

飛鳥に長く京が置かれたのは、ふつう以下のような理由があげられる。

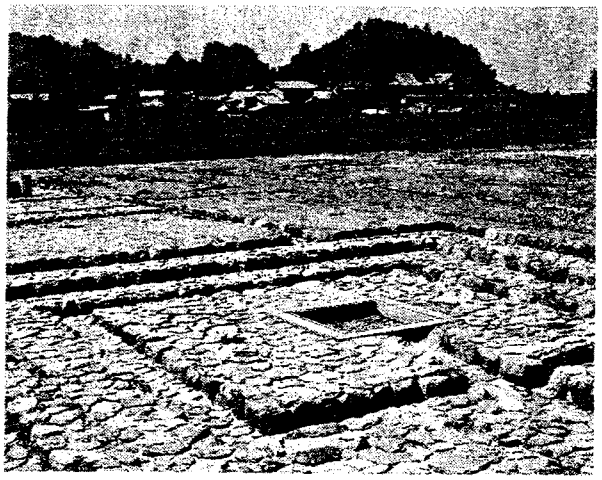
①当時の有力氏族である蘇我・阿倍・巨勢(こせ)・大伴の諸氏や朝鮮系有力氏族の東漢(やまとのあや)氏などの地盤や居住地に隣接し、諸勢力の釣り合いのとれる地であること。

②大和三山その他の丘陵や飛鳥川などに囲まれ、軍事的に防衛しやすい土地であること。

③南北に走る上ツ道・中ツ道・下ツ道の三道に連絡しやすい地であるだけでなく、盆地を東西に走り、東国や難波へ通じる横大路や、南の吉野川にも遠くない交通上の要衝であること。

★伝飛鳥板蓋宮跡(でんあすかいたぶきのみやあと)

飛鳥板蓋宮は皇極天皇の皇居である。『日本書紀』によれば、皇極天皇は同天皇2年(643)4月、豊浦(とゆら)の小墾田宮(おはりだのみや)から飛鳥板蓋の新宮に移った。大化改新の序曲として知られる蘇我入鹿誅殺事件の舞台となった宮である。また、孝徳天皇の死後、斉明天皇元年(655)正月重祚し、飛鳥板蓋宮で即位した。この冬、火災にあい焼失、そのため飛鳥川原宮に遷宮した。



《伝飛鳥板蓋宮跡》

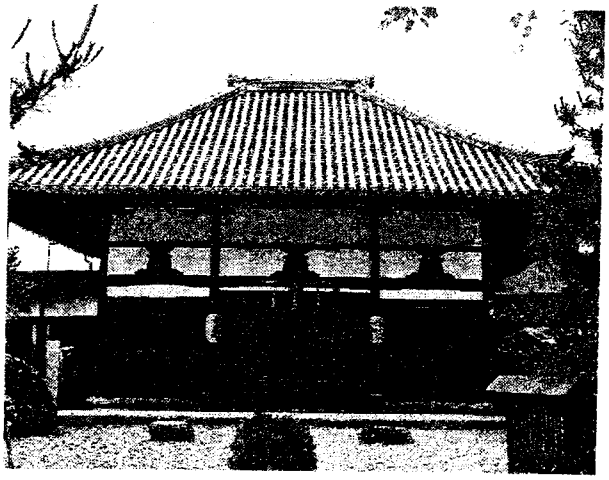
飛鳥板蓋宮の所在については飛鳥川東岸、大字岡の平地部で見つかった宮殿遺構(伝飛鳥板蓋宮跡)をあてるのが通説だが、この遺構は2期以上の重層遺構であり、単純に断定できない。これまでこの遺構が飛鳥板蓋宮とされてきたのは、飛鳥川を西に越えたところに飛鳥板蓋神社があることからなどによるが、少なくとも上層の宮殿遺構は時代的に合致せず、『紀』の記述と異なって焼亡した跡がない。

上層の遺構はその年代から見ると、飛鳥浄御原宮(あすかきよみはらのみや、672年造営)か嶋宮(671年頃から8世紀まで存続)にほぼ一致している。また、下層の宮殿遺構と時代的に重なるのは後飛鳥岡本宮(のちのあすかおかもとのみや、662年～672年)か飛鳥板蓋宮である。これらの宮殿のうち嶋宮は島の庄にあったと思われるので、後飛鳥岡本宮か飛鳥板蓋宮が下層遺構で、飛鳥浄御原宮が上層遺構と考えるのが妥当のようである。しかし、岡本宮は明日香村奥山から小山付近に比定する説があり、また、飛鳥浄御原宮は大字飛鳥の西北に比定する説があって最終的な決着がついていない。なお、下層遺構の下には6世紀代の竪穴住居群が見つかっている。

現在この遺構は国の史跡として整備されているが、復元してあるのはレプリカで、本物は地表下に埋め戻されている。

★飛鳥寺（あすかでら）

蘇我氏が創建した日本最古の寺院。法興寺・大法興寺・元興寺ともいう。山号は鳥形山（とりがたさん）、現在、法灯を受け継ぐのは１院のみ（堂１、２宇）で安居院（あんごいん）という。真言宗豊山派に属し、本尊は釈迦如来、通称「飛鳥大仏」と称される。この他十二神将（平安時代）・不動明王（室町時代）などがあり、本堂と庫裏の間に「飛鳥寺」の刻印のある六角灯籠（室町時代）がある。



《安居院（飛鳥寺）本堂》

飛鳥寺の開創は崇峻天皇元年（587）で、開基は蘇我馬子である。『日本書紀』によると、この年、百済より寺工・露盤博士・瓦博士が渡来したことを記した後に、仏舎利が朝廷に献上されたので馬子が「飛鳥衣縫造（いぬいのみやつこ）の祖、樹葉（このは）の家を壊（こわ）ち始めて法興寺を作る。此の地を飛鳥の真神原（まかみのはら）と名（なづ）く。亦は飛鳥の苫田（とま）と名」づけたという。最終的にこの法興寺の伽藍が完成したのは推古天皇４年（596）で、約１０年を要している。また完成にあたって、大臣（馬子）の男、善徳を寺司に拝し、慧慈・慧聰が住したとある。

★飛鳥大仏（あすかだいぶつ）

重要文化財。現在は安居院（あんごいん）本尊、もと飛鳥寺本尊で、正式には安居院釈迦如来座像という。銅造、像高２７５ｃｍ、丈六座像で、方形の石造須弥壇上に安置される。

目と額の部分、右手指三本ほどに当初の部分を残すのみで、その他は建久７年（1196）の雷火で破砕したのを造り直したものである。わずかな残存部分に推古天皇３１年（623）鞍作止利（止利仏師）が造った法隆寺金堂釈迦如来像との類似が指摘されている。

《飛鳥大仏》

飛鳥寺本尊造立について『日本書紀』では、推古天皇１３年（605）に天皇が発願し、鞍作止利に命じて銅繡丈六像各一躯を造らせ、これが翌年に完成、元興寺金堂に安置したといい、『元興寺縁起』に引く「丈六光銘」ではその完成を推古天皇１７（609）年とする。後者は光背銘に基づき、『日本書紀』に記す完成年時は「丈六光銘」記事による誤解によると見て、鞍作止利による推古天皇１７年の完成とするのが従来の学説である。しかし、近年飛鳥寺発掘調査により、塔を中心に中・東・西の三金堂があったことがわかり、現本尊がもとから中金堂にあったと信じられることから、これに異説が出ている。

すなわち『日本書紀』『元興寺縁起』中の「塔露盤銘」には推古天皇４年（596）に造寺が終わったとあり、後者にみえる銅繡二躯丈六はやや遅れて建立の東西金堂にそれぞれ安置され、いま失われたと考えるものである。

★蘇我入鹿の首塚
(そがのいるかのくびつか)

飛鳥寺安居院(あんごいん)の西方、小字五輪に、「五輪塚」あるいは「首塚」と称する土盛があり、その上に五輪塔が立っている。

『飛鳥古跡考』には「蘇我入鹿大臣石塔」として「村ヨリ一町未申ノ方田中に五輪塔少し残れり、里人もさこそ申侍る」とある。伝承では、蘇我入鹿の首をここに埋めたという。しかし、土盛はともかく五輪塔はまったく時代が合わない。また、飛鳥寺に閑居した恵慈・恵聡の墓ともいう。五輪塔は花崗岩製である。水輪は上下逆になっているが、様式上から南北朝期に造立されたものとみられる。

《蘇我入鹿の首塚》

★飛鳥座神社
(あすかにいますじんじゃ)

飛鳥寺の北東、樹木におおわれた小丘上に鎮座する。創祀年代は明らかでないが、大己貴命(おおなむちのみこと)の女、賀夜奈留美命(かやなるみのみこと)を飛鳥の神奈備に奉祀したことに始まるという。

淳和天皇の天長6年(829)3月10日、神託により高市郡甘南備山から現在地の鳥形山へ遷座した(『日本紀略』)。この甘南備山については雷丘説・甘樫丘説・ミハ山説があって一定しない。

その後、貞観8年(859)9月には使いを遣わして風雨祈願があり(『三代実録』)、貞観16年(874)6月28日の太政官符は、当社に大社としてその封戸をもって天太玉・櫛玉・臼滝・賀屋鳴比女など小社を修理することを命じている(『類聚三代格』)。また、延喜の制では4座とも大社として相嘗・月次・名神・祈雨等の祭に幣帛を受け、祈年祭には一般班幣のほか馬1疋を加えられている。

この神社の当初の祭神が賀夜奈留美命一座であったことは「出雲国造神賀詞」にある「賀夜奈留美命の御魂を飛鳥の神なびに座(ま)せて、皇孫(すめみま)の命を近き守神と貢(たてまつ)り置き…」によって明らかだが、『日本書紀』朱鳥元年(686)7月5日の条に「幣を紀伊に居す国懸神・飛鳥の四社・住吉大社に奉りたまふ」とあり、天武天皇の飛鳥浄御原宮の守護神として四柱の神が奉祀されていたことがわかる。

当社の座数は『延喜式』にはじめて「飛鳥座神社四座並名神大。月次相嘗新嘗」と明記されるが、当時の4座がどの神であったのかは諸説があって定かではない。その後、4座の神々は時代を経て変転とする。現在では、事代主神・高皇産霊命(たかみむすひのみこと)・飛鳥三日比売命(あすかみかひめ)・大物主神を祀っている。

この神社では毎年2月の第1日曜日に五穀豊穣・子孫繁栄を祈る神事として「御田祭(おんだまつり)」が行われる。これは民俗学的にもめずらし性的な神事として名高く、昼ごろから農耕の所作を演じた後、天狗とお多福が夫婦和合のさまを行う。この神事に遣われた神を持ち帰ると子宝に恵まれるという。境内にも多数の陰陽石が祀られている。

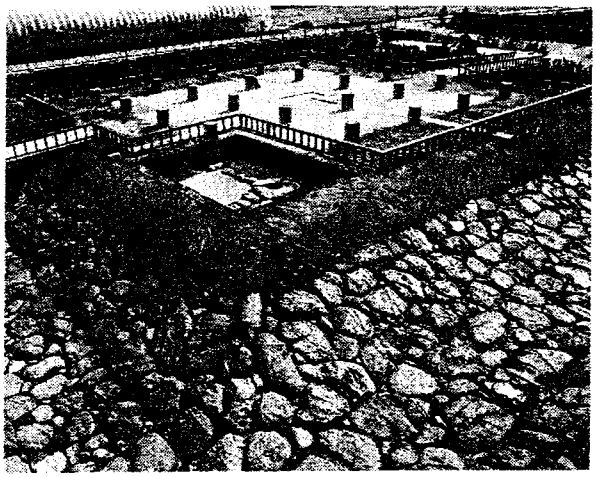
厳密にいえば、当社には氏子がいないが、神職は飛鳥家が世襲している。宮座としてあるのは摂社八幡神社で、大字飛鳥に東講・西講、大字東山に上講・下講があり、なお、石段の堀口の井戸は飛鳥井と呼ばれ、催馬楽(さいばら)「飛鳥井にやどりはすべし。おけ、かげもよし、みもひもうまし(さむし)みまさくさもよし」と歌われた井戸といわれている。

★飛鳥水落遺跡（あすかみずおちいせき）

７世紀代の石敷き遺構検出された明日香村教育委員会建物の南側にある。昭和４７年(1972)１０月から翌年１月にかけて、奈良国立文化財研究所と奈良県教育委員会とが共同調査を行い、石組の溝１、礎石堀方列１、掘立柱列等を検出した。

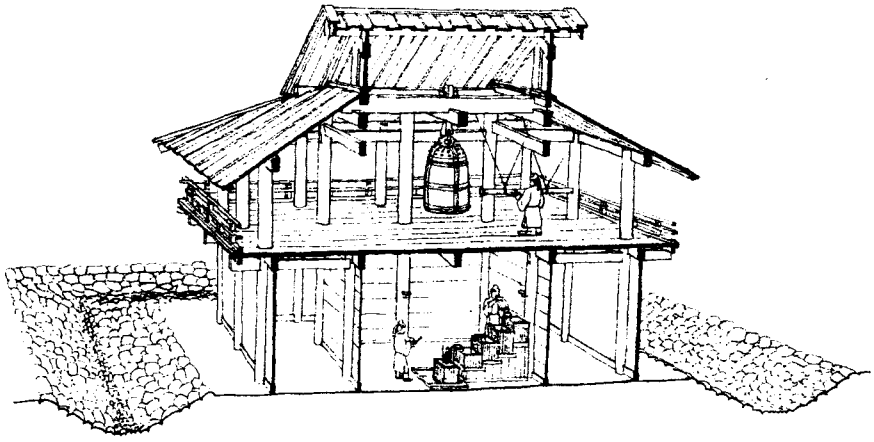
石組溝は径６０ｃｍ～８０ｃｍの自然石を組み上げて正方形にめぐらせた大規模な堀状の遺構である。溝の幅は底では約１．８ｍ、上部は約５．４ｍを計測。東西および南北間の心々距離は約２４ｍである。

方形部内の西方に、溝に沿った南北の堀方５間を検出。北端の柱間は約２．４ｍ、ほかはいずれも約２．８ｍ。石組溝の南外側に沿って掘立柱穴１列を検出。柱間は約２．８ｍ。この柱穴列の南側、約５．６ｍの地に掘立柱穴１が検出された。



《飛鳥水落遺跡復元基壇と柱》

これらにより大石を貼りつめた方形基壇と総柱の楼状建物が復原できる。楼状建物は地下に据えた礎石上に建ち、礎石は地中梁工法と呼ばれる特殊な工法で固定されている。基壇中央には黒漆塗りの木箱が設置され、そこから派生する木樋暗渠（もくひあんきょ）や桝・銅管などの導排水設備が埋設されている。



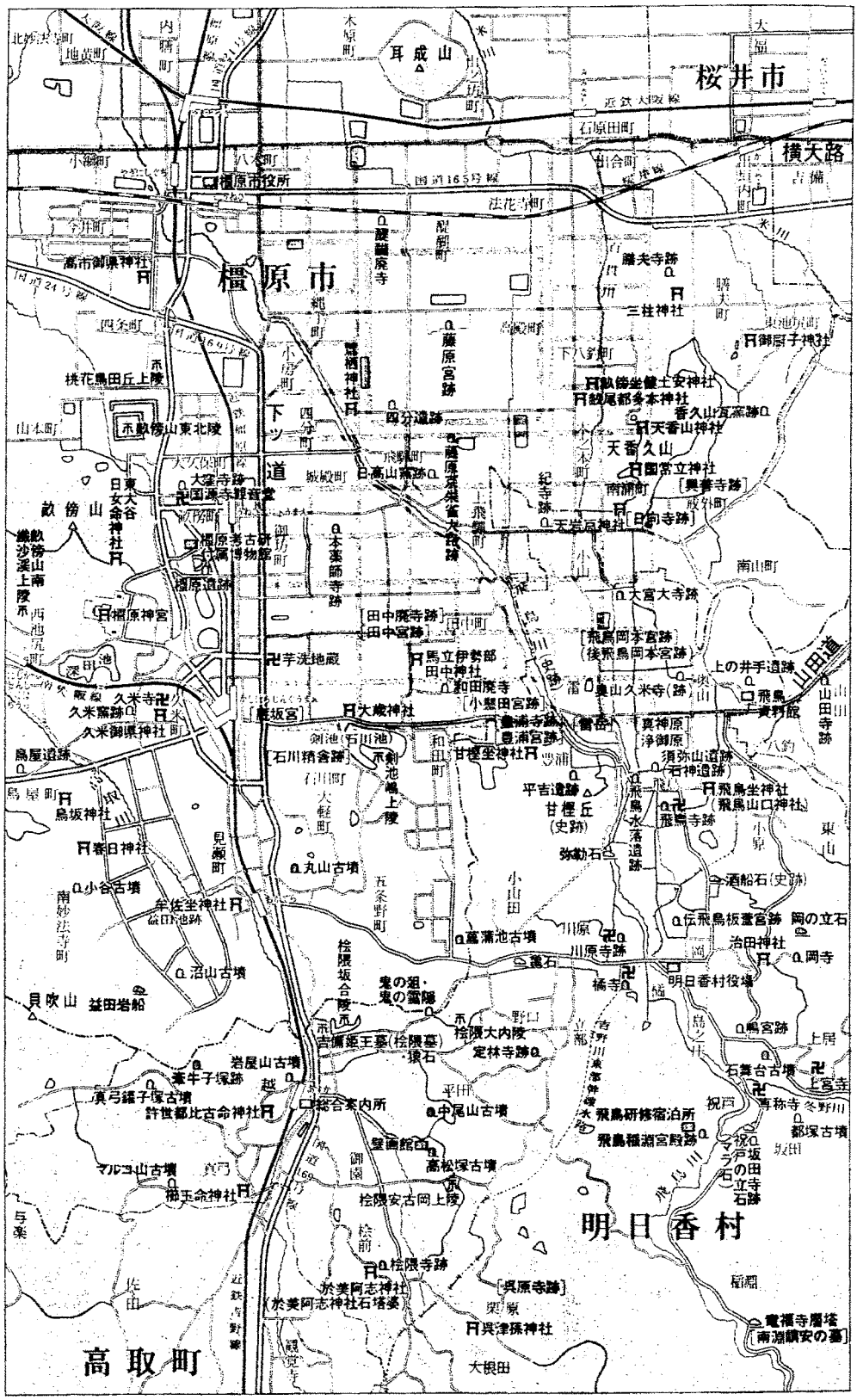
《飛鳥水落遺跡復元模式図》

他に例のない特殊な基盤構造や施設を備えた建物であり、『日本書紀』斉明６年(660)条にみえる、中大兄皇子が初めて造営した漏刻（ろうこく、古代の水時計）」跡と推定されている。国史跡に指定され、現在方形基壇と柱が復元されている。

★甘樫丘（あまかしのおか）

味橿・甘橿・味白橿・味檀・甘檀などとも表記する。古代においては、現明日 香村豊浦の北東から南西に連なる丘陵一帯の総称と思われるが、いまでは北東に位置する最も高い標高１４８ｍの丘を甘樫丘としている。アマカシはアマガセ・マガセつまり曲瀬の転訛で、飛鳥川の湾曲した瀬に起因した丘名と考えられている。

『古事記』の允恭天皇の段に「是に天皇、天の下の氏氏名名の人等の氏姓の忤ひ過てる


桜井市
橿原市
明日香村
高取町
耳成山
橿原市役所
高市御県神社
橿原神宮
橿原考古研究所附属博物館
橿原遺跡
畝傍山東北陵
畝傍山南陵
畝傍山東大谷日女命神社
畝傍山沙溪上陵
畝傍山西北陵
畝傍山
桃花鳥田丘上陵
久米寺
久米寺跡
久米御県神社
鳥屋遺跡
鳥坂神社
春日神社
小谷古墳
宇佐坐神社
益田池跡
沼山古墳
貝吹山
益田岩船
岩屋山古墳
蓮牛子塚跡
真弓鑓子塚古墳
許世都比古命神社
マルコ山古墳
橘玉命神社
総合案内所
壁画館
高松塚古墳
中尾山古墳
檜隈安古岡上陵
檜隈寺跡
於美阿志神社
於美阿志神社石塔婆
呉原寺跡
呉津孫神社
大根田
檜隈大内陵
定林寺跡
吉備姫王墓(檜隈墓)
鬼の俎・鬼の雪隠
檜隈坂合陵
五条野町
丸山古墳
高蒲池古墳
川原寺跡
橘寺
明日香村役場
鳴宮跡
石舞台古墳
上宮寺
専称寺
都塚古墳
飛鳥稲淵宮殿跡
飛鳥研修宿泊所
祝戸坂の田寺石塔跡
竜福寺層塔
南淵請安の墓
飛鳥寺
飛鳥水落遺跡
飛鳥坐神社
飛鳥山口神社
甘樫丘(史跡)
平吉遺跡
須弥山遺跡
石神遺跡
真神原
浄御原
豊浦寺跡
豊浦宮跡
甘樫坐神社
剣池(石舞台)
石川精舎跡
剣池嶋上陵
大軽町
見瀬町
石川町
和田町
豊浦
雷
小山田
小山
飛鳥岡本宮跡
後飛鳥岡本宮跡
大宮大寺跡
田中廃寺跡
田中宮跡
馬立伊勢部田中神社
和田廃寺
小墾田宮跡
大歳神社
雄坂宮
芋洗地蔵
上の井手遺跡
飛鳥寺
黄野館
山田寺跡
山田道
真神原
弥勒石
酒船石(史跡)
伝飛鳥板蓋宮跡
岡の立石
治田神社
岡寺
橘寺
藤原宮跡
藤原京朱雀大路跡
高山廃寺
四分遺跡
国源寺観音堂
本薬師寺跡
天岩戸神社
紀寺跡
南淵町
興善寺跡
向寺跡
天香久山
天香久山神社
国常立神社
香久山瓦窯跡
鎌足神社
鎌足坐健土安神社
鎌足都多本神社
三柱神社
藤夫寺跡
御厨子神社
慧日寺跡
慧日寺
下ツ道
四条町
下八釜町
高殿町
城殿町
飛鳥町
飛鳥川
小房町
縄町
御坊町
大安寺跡
日東大谷日女命神社
桜井市役所
法花寺町
国道165号線
近鉄大阪線
横大路
石原田町
八釜町
内膳町
地黄町
木原町
耳成山
大福
吉備
南山町
東池尻町
山本町
今井町
小殿町
四条町
1 : 35.000
500
1000m

を愁ひたまひて、味白檮の言八十禍日の前に玖訶瓮を居ゑて、天の下の八十友緒の氏姓を定め給ひき」とみえ、『日本書紀』允恭天皇４年の条には「則ち味橿丘の辞禍戸碑に探湯瓮を座ゑ」とある。なお、「弘仁私記」序には、これに使用した釜が高市郡に残っていたという（『釈日本紀』）。また、『日本書紀』皇極天皇３年１１月の条に、蘇我蝦夷・入鹿が家を並び建て、城柵・兵庫を作って防備したという甘檮岡も同地である。同じく斉明天皇５年３月の条に「甘橿丘の東の川上に須弥山を造り」、陸奥と越の蝦夷を饗応したとの記事がある。

《甘樫丘遠景》

一方、現甘樫丘を「飛鳥の神名火の丘」とする説（『明日香村史』）も有力のようである。真神原（飛鳥寺）あたりから見るとちょうど三輪山のような円錐形の山に見え、この丘の西には甘樫座神社が鎮座する。『延喜式』神名帳には「甘樫座神社四座」とみえ、同書四時祭上には山口神の一つとある。また、『三代実録』貞観元年(879)正月の条に、従五位下から従五位上に神階が昇叙した記事がみえる。

★大和三山（やまとさんざん）

奈良盆地南部に鼎立する小山。３角形の頂点に立つ畝傍山・耳成山・天香久山の３山で、「三ツ山」または「和州三山」ともいう。

畝傍山は標高１９９．２ｍ。三山中の最高峰で西南に位置し、花崗岩中に黒雲母安山岩の噴出したものである。耳成山は標高１３９．７ｍ。北に位置し、含ザクロ石安山岩からなっている。

この２山はともにトロイデ火山形（富士山型）を示しているが、生成当時の原形ではなく、元は二上山（４７４．２ｍ）と同じくらいの高さであったが、浸食を受けて盆地の陥落とともに沈下し、その山体は堆積土に埋められ、わずかにさその頭部を現しているのにすぎない。

天香久山は標高１５２ｍで、東南に位置する。これは火山ではなく、竜門山地の末端部に属し、花崗岩のほかハンレイ岩などの堅岩からなるため浸食に耐えて残ったものである。他比べると山県が緩やかで、「へ」の字形をしている。

大和三山を歌った歌に次のようなものがある。

大和には　群山あれど　とりよろふ　天香具山　登り立ち　国見をすれば　国原は　煙立ち立つ　海原は　かまめ立ち立つ　うまし国ぞ　あきづ島　大和の国は

舒明天皇（『万葉集』巻１／２）

香具山は　畝傍ををしと　耳梨と　相争ひき　神代より　かくにあるらし　古(いにしへ)も然(しか)にあれこそ　うつせみも　妻を　争ふらしき

中大兄皇子（『万葉集』巻１／１３）

春過ぎて　夏来るらし　白たへの　衣干したり　天香具山

持統太上天皇（『万葉集』巻１／２８）

やすみしし　わご大君　高照らす　日の皇子(みこ)　あらたへの　藤井が原　大御門　始めたまひて　埴安(はに)の　堤の上に　あり立たし　見したまへば　大和の　青香具山は　日の経(たて)の　大き御門に　春山と　しみさび立てり　畝傍の　この瑞山(みずやま)は　日

の緯(よこ)の　大き御門に　瑞山と　山さびいます　耳梨の　青菅山は　背面(そとも)の　大き御門に　宜(よろ)しなへ　神さび立てり　名ぐはしき　吉野の山は　影面の　大き御門ゆ　雲居にそ　遠くありける　高知るや　天の御陰(みかげ)　天知るや　日の御陰　水こそば　常にあらめ　御井の清水　　藤原宮の御井の歌（『万葉集』巻１／５２）

資料作成・文責　備陽史探訪の会旅行委員会
（平田恵彦・坂本敏夫・三好勝芳）

資料作成の主な担当部分は以下のとおり

初日	筒井氏・柳沢氏・豊臣秀長・郡山城等に関すること	→坂本
初日	片桐氏・慈光院・額安寺等に関すること	→三好
２日目	飛鳥に関すること	→平田